その膝の上には、流れんばかりにはぶり落つる涙の滝津瀬。

「解つた、咎め立てはせん。その本心の芽が萠したのを、私は確かに認めて居る、心配せんで可い、

津奈さん、私は最初に、自分の取るべき道を誤つて居た。

その結果、貴女の爲めには、大切の戀を割て……思ぢやつた。流れ奔る川を私は權勢と富との力で堰止めやうとしたのさ、譬へがね。その水が嵩んで來れば、いくら高い堰板でも、溢れ出るのが當然さ。」

「妾が重々惡うございました。御前樣、妾、最う、御前樣にお會はせ申す顏がございません。それにも拘らず妾が强顏しく自分で身の裁判をいたしませんのを、定めて憎い奴と思召てございませう。」

嗚咽、歔欷、彼女は、禁め兼たる涙を抑えんともせず、

「最うどうか、そのお情深いお言葉をかけて下さりますな。

結句それが妾にとりましては、罪なのでございます。思ふ存分御叱責の苦を浴たうございます。

この身を撲つなり刻みなりと遊ばして……唯。何といふ妾は不埒な女でございませう、われながら愛憎がつきましてムいます。」

「可い。可い。左樣。神經を惱ましては致方がない。私も先刻も云つた通り、一時は憎い奴だとも思つた……が、何だか。それも、咎める方が惡いので、私自身、お前の不貞を責める程、高潔だつたか、はづかしいが、懺悔すれば、私は津奈さんの容色に溺れて、富士子を離別したのだ、この最初撒いた因が、恐ろしい果を生んだのだよ。まアさ、涙を拭つてくれ。」

子爵は、席を進め津奈子を見たり、

「諄々いふが、最初は私も立腹した……が人情の自然に打克つとは出來ん、私の友達に、貴女も知つての竹内さ。あの男抔は、さきに支那に行つて居

る留守中、夫人が、書生と一緒に成つて、遁げ出した、その後、新細君を迎へたが、何時か又、小石川の森で、先夫人と逢引をして居つた。事實だ。

これが人生の眞事實で、人は、一旦、或る感情の爲めに其貞操を犠牲にしても、又、何時しか、元の鞘に戻るのさ。

私は深く咎めん、

貴女は、定雄といふ壯士と邂逅と、昔の疵が痛み出したのだ。それを堰止めると、どうなるか。

きつと、其塚を超て、不義の氾濫を免がれない。

こゝに於て、私は、最う、最初お前の愛情を割て、私に從はせた一時の感情を心の底から深く愧として居るのだ。」

案外なる子爵の宣告に、津奈子は、呆れ惑ひけるなり。

「否、假令、何と仰有つて下さつても、私が惡いのでございます。」

夫人にお詫を申して、今までは、妾が、この身の罪をお謝り申すのが第一の捷徑で、その次は、すべて私の罪狀を御前樣に申上げて、その上妾は、潔よく覺悟をいたします積りでございます。」

子爵は默然として聞き入りしが

「その謝罪も可からう。……が、津奈さん、私は、貴女の罪を定める程の自分を潔白とは思つて居らん。

近頃、私は、富士子のことについて、非常に煩悶して居る。初めは、貴女を愛してゐながら、昨今頻りと、小枝子を愛する念に驅られて居る。

小枝子は、私の兒だ。

私は、この子の愛情を感ずると共に富士子に對する人情に打たれて了つた。有體にいふが、私は、今では、自分の半生の失策……貴女をして罪を犯さしめ、私自分、精神上の罪惡を犯しつゝあることを非常に悲しんで居る。」

子爵の苦悶は、津奈子には不可能の難問たりしがごとし。

「貴女は、さつきから、頻りに覺悟々々といふが、どういふ覺悟をしてゐるのか？」

「……」

「何にも包み隠すことは不用。云つて見な、若しそれが爲めに救濟の出來ぬ深味へ陷るやうなことがあつては大變だ。私は、溺れたるを救ふ覺悟で、貴方を許すのだ許した上は、飽まで其の幸福を擔保したい。人誰か罪なからんやだ。過つて、悔ゆるを知り、悔いて、改むるを知れば可いのだ。解つたかね。」

「妾は、妾自分の不德を犯した罪を償ふ丈けのことをいたさねばなりません。

御前樣。どうか、妾に二三日の暇を戴きたうございます。」

「何だ。暇をくれそれでどうせうといふのか？」

子爵は少し熬ち氣味にて

「それで、すつかり罪過の念を根本から洗除することが出來ると思ふか。あハ……さう神經的に考へぬまでの事ぢや。併し、そこまでは干渉せん、貴女が思ふ樣に……氣の濟むやうにするが可いさ。」

表には、風一しきり。雨しぶき、扉に吹き當たる夜の嵐。

二人は、相默坐しぬ。その顏蠟より白し。

（十四）

波瀾は、かくのごとくにして、相模の沖よりも急に間宮家に渦まき來れり、而して、佐伯家の樓上には、六月、綠陰、世は、いよ〳〵影濃くなり增さりゆくにも似ず、富士子の病は、刻々に迫りて、癒せぬ、悶えぬ、血は、櫻の

ごとく、白き夜具を染めて、しばらくは、脈さへ絶たり。

「そりア不可せん。貴方。海ですよ。危ない。妾どうせう。」はら〳〵と涙は瀧のごとし。

夢魔にや、襲はれたる。富士子は、不意にかく叫びしに、來會せし田邊も、主人の延善も、顔見合はせたり。醫師は、膝行して、富士子の脈を握りぬ。

「母さん。あッお母さん！」

伏し轉びて、小枝子は、母の肩に縋り寄りしを、醫師は、慌てゝ引放し、

「寄ちやア不可い。今、おッ母さんに觸つて搖かすとお眼をさましなさるから、貴女は、下へ行つて、お出でなさい。」

時子は、危懼の眼を夫人の面上に注ぎて、

「大分、顔色が出て來ました。」

「脈が打て來ました。」と醫師も微笑みつ。

「安心ですか？」

延善は問へり。

「實に、我輩も驚いた。」と田邊は和せり。

「イヤ、時々、熱の加減で、かういふ差引はあるが、まだ、中々、心に力があるから、大丈夫とは思つてゐたが、病氣といふ奴ア、醫師でも、時々、不意の突進を食て狼狽ますからな。併し平生養生が可いから、この位のことでは、滅多なことはありません。……が、皆樣の前で申し上げとくが、咽喉へ來ましたよ。喉頭結核といふ難症になり相です。呼吸器丈けは、十分勉强してやらして下さい。」

彼は、雙手を、蒲團の片端につき、身をのり出して、病人の樣子を覗ひしが、そと、夫人の脇に手を入れ、檢溫器を出して、黃昏の光に透して、其度を改めんとして、眉を顰めぬ。暮色來り、容易に其を辨せざるなりき。

「燈を……」

「唯。」

時子は立ち上りて、しづかに燈火を用意すべくハ楷を下れり。

「叔母ちやん、お母さんは何でもないのね。死はしないね。妾、もしおッ母さんが死にでもすると……」

聲を潤ませて、物案じ氣に、薄暗き四疊半に坐りも得せず、打顧へて、小枝子は時子の袂にすがりつく。

女中はランプを點して上り來れり。時子は、この幼なき小枝子の垂髪を撫でつゝありしが、胸迫りて、涙のみ先たつなりけり。

「其樣なことを……緣起の惡いことをいふのではありません。」

僅かにかく云ひしのみ、果は、小枝子に聞ゆるまで打咽ぶなりき。

「だつて、もう、不可ないンだつて、叔父さんが、昨夜も田邊の叔父さんに

話してたぢやないの、その傍で叔母さんも泣いて入らつしたわ、妾お母さん歿なつたら、何せうかと思つて……ね、叔母さん。」

「……」

二人は相擁して泣く也。遺兒の運命を擔へる一少女と、世にも、頼れる姉に先だゝれんとする妹と……階上にては、ガラス窓のカーテンを引く音す。表には車のきちん！と礫を嚙む氣色したり。

時子の座を去りし後、富士子の病は、急かに一變して、見る〳〵其顏色は、土と變り、唇は紫となりぬ。

「確乎するんですよ。」

病人は首肯けるのみ。

「藥です。」

病人は肯首を振りて、最早や藥餌も何の效なしとの樣なりき。

「大丈夫です。確乎なさい!!」と延善は、耳に口を寄せたり。
「小枝！……小枝……」
病人は。小枝子を求むるごとくなりき。
忙しく小枝子は、母の病牀にかへり來りて、顫ふ手に母の痩せる手を握りめ、
「お母さん、死んぢやア厭よ!!」
少女が涙は、母の蓐に流れそゝぐなり。
「小枝さんです。時子はどうした。」延善も狼狽せり。
時子は驅け上りて、姉者人の最期の牀に侍り、
「お姉さん。時でございますよ。貴女妾がお判かりに成りますか。」
深く首肯けり。
「まア嬉しい。貴良人、お眼が餘程確に成つて參りました。」

看護婦は、病人の頭部を抱え、醫師は、又藥を盛りつ。病人は微かに、
「時さん。最う駄目よ。どうか其處の聖書を讀んで……」
「お姉さんのお好きな句です。羅馬書の六章の三、お姉さん讀ますよ。
（イエスキリストに合はんとて、バプテスマで受けし者は卽ち死に合はんとて受けしものなるを爾曹知らざるか、故に我等、その死に合ふバプテスマに由つて、彼と共に葬らるゝは、キリスト父の榮に由りて、死より甦されしごとく、我儕も新しき生命に行むべき爲也。）
お解りに成りましたか？」
「有難う。小枝子……手をお貸し。」
「母さん、妾、手……母さんの手と……ね。」
「小枝さん、お前さん妾が歿なつたつて、決して無理をいふのぢやありませんよ。叔父さんや叔母さんの仰有ることをね、大切に……背いちやアなりま

せんよ。」

「はア。だつてお母さんは、まだ〳〵死…死ぬなんかそんなことを…何故其樣悲しいことを仰有るの……」

富士子は、譯もなく、涙を流せり。

「時さん。耳……妾、最う舌が……」

時子はにじり寄て、

「何でございます。何なりと御遠慮なく仰有つて下さいましよ、お姉さんのお身體は、良い方に向つたのですけれど……」

聲いと微かに、

「まアその手箱を……」

「解りました。手箱を出せと仰有るのですね。」

「否ね。妾、息を引取つたらどうかそれを小枝子に……ね。中に物が入れて

ありますから……」

「頼む!!」

表に聲あり。されど、この臨終の匆忙たる光景裏に、人生の最後に、悲哀の舞臺に立てる人のその聲に耳に入るものはあらざりき。

柱時計は、八ツを打ちぬ。ランプの灯は飛び入る蛾の羽を燒きて瞬きたり。

「富士さん!! 富士さん。私だよ。間宮だよ。唯一だよ。」

狂氣のごとくに間宮子爵は、富士子夫人の耳に口つけて叫べり。その聲は、黄泉にも通ずべきかと思はるれど、冷て氷のごとき富士子は、わづかに、其唇を顫はせるのみにて、何人のかくは、わが死せんとし……半ば死となりたるわれを擁して、物狂はしげにわが名を呼ぶらん。とばかりに、冷やかに瞳を張りしが。

「私が惡かつたから許してくれ、唯一、今日といふ今日、實は、十年間の苦

痛を訴へに來たのだ。」

子爵の涙止めんとするも能はざるがごとくに、夫人の面上に灑ぐや、富士子の凉しくして玻璃のごとき眼の底に潮の波浮動して、やがて、キラリと星のごとくに輝き落ちたり。而も、諦視する其正面の人の前に凍て、鐵のごとく、痩せて鶴のごときを手を差伸べて、打顔へつゝ、確乎と、子爵の手を握りめたり。

これを見たる一座の人々は、いづれも面を背けて涙を呑みたり。

「お姉さん。解りますか。エ、お解りに成りますか。」

富士子は輕く肯づきて、いかにしけん、くるりと寐がへりして、面を壁に向けたり。

「どうしても最う駄目ですかなア。」

「仕方がありません」醫師は辛うじて答へつ。

「田邊君。私は君に面目がない。せめては、富士子の前で、十分自己の懺悔を試みやうとして、驅つけて見れば、この始末です。私はこの慘ましい姿を見ると、何も胸が一杯に成つて言ふ言葉を發見しないです……。」

田邊は例の嚴しき口調で

「併し、吾輩は、君の心中を察しとるよ。君が神經的に種々なことを考へられるよりも、も少し平和に、富士子君は樂觀してゐられた、最後にもなほ悔改めは、善美の事業です。そして、延善君、君から、富士子夫人の精神をよく間宮君の前に申し上げて下さい。せめては、富士子君が存命中に、すべてを解決さしたいからね。」

延善は膝を直して

「間宮君。貴方の精神……今の夫人を去つて、義姉の元の愛情にかへつて下さることは、本人には、非常に嬉しう思つてゐたですが、折角、十年も御つ

れ添ひに成つた夫人を……それは、決して本意ではないから、どうか子爵が一生、その婦人を愛して諭らないやうにして戴きたい。と始終言つてゐられまして、恐らくこれが姉上の素志だらうと存じますから……」

子爵は、俯垂して石のごとし。延善が刻み入るごとき深刻なる調子は、精神上、富士子の復讐としては、子爵にとつては、鋸引きの囚刑よりも酷なるものなりき。

多くの悲痛を後にして、富士子は、永眠の牀に入りぬ。涙を以てしても、情を以てしても、死はすべてを灰のごとくに沈默ならしむ。

小枝子の手を右に、子爵の手を左に、満足を以つて、富士子の生涯は、全く靜かに靜かに墓に進みぬ。

「甚だ遺憾だ。富士さん。最一度眼を明けておくれ、エ。どうぞ私のいふことを聞いておくれ、久しく、私は誤つて居つた。迷つて居つた、今や全く覺

醒して、それからだ、津奈は、自分の罪を謝して、私から、隱遁して了つたよ。あゝ、萬事休すだ。田邊君。佐伯君。どうか、私の意中を察して下さい。」

「姉上も、其事について、十分滿足してお歿れに成りましたから、少しも貴君の行爲に就ては、心にかけて居れませんでした。最近の貴君の行動については、わけて感謝してお出でございました。」

白衣の人は、周圍の人々にその亡骸を托して横はりぬ。

小枝子!!。稚なきこの少女は、唯だ世に一人の母を失ひたる悲しみの中にも、なほ來たるべき世路の酸苦を夢みるに餘裕なくて、

「泣くんぢやありませんよ。さア、妾と一緒に下へ行きませう。」

と無理に拉し去りし時子の袂に縋りつゝ、悲しみ痛みし心をわづかに慰められつゝ、涙はいつか頰に乾きたり。

翌くれば、薄命の人は、曾つて己を捨てし良人の手厚き葬儀に送られて、

墓の人とならんとす。

喪服着たる小枝子は、今更のごとく泣き悲しみしが、それもやがては、馴れしペス(犬)の頭を撫でゝは、歌ひぬ。

その夜、新佛は、神道の齋魂として祭られたり、子爵も坐にあり、一同は、亡き人が、秘して、生前何人にも示さゞりし小箱を開きたり。

小枝子を正坐に、延善は、富士子が遺書の文章を讀みしが、

「……小枝子は、妾が最愛の者に候、されば其前途の運命にまで心一時も落居ずいろ〳〵考へ申候末

決して結婚せぬやう

卿の爲めに、母が一生の訓誡に候。良人を有せぬ代りに卿は教育の事に從ひて主義を有する人となり玉ふべし。妾も一たびは盛春の光に醉ひ申候。その得るところは、今の悲酸に候。妾は卿は切に獨身にて善き生涯に入らんこと

をのみ申候……」

「獨身??」

一坐粛然として襟を正しつ。この遺言に耳を傾けぬ。

第二章

（一）

五月も央を過ぎて、地に芍薬の影、照る日の光を浴びて、燃ゆるやうにな
り。

楢の葉の影は、楪のそれと重り、青空一面に虎斑を印したる上を、さやさ
やと風の渡りて、日輪の眩ゆき氤氣、夢のやうにさ迷ひぬ。何となく初夏の
日盛は人を醉すべき風情あり。

この廣庭に、櫻の雪を浮べし春の美しさは、いつしか消えて、今は、花を
止めぬ木立深し。

芝生と、芝生との間を、白う小砂に劃りて、その緣には、名の知られぬ、
西洋花の紅き白きが今や盛り咲きたり。

人の氣色せしにや、頸輪の光る茶と白との斑の丸々と肥えた洋犬の頭を上
げ、大儀相に、前足をのめらして、大きな欠伸一つして、のそり〳〵と尾を
掉りながら、彼方に歩みつ。

「まア。面倒相に、お義理に尾なんか掉らなくッても可いことよ。」

小屈みに成り、白く優しい手にて洋犬の頭を撫でぬ。

「S！、お前、先生を知らないかい。どこへお越なすつたか知らないこと？。
アラ。又欠伸だ。厭なSだね。」

何だかお饒舌りだ。憚りながら解らない。好い臭だ。香水が芬々とするが、
俺ア。肴の香の方が好い。といはぬばかり、懶相に、娘の袂をすりぬけるや、
一散に走りぬ。向ふの賄部屋より笊を抱えたる一人の女中が、口笛を吹ける
なり。

「何といふ現金なSだらう。」婦人は、微笑を浮べつ。足元の西洋花の半開な

るを抓み取りて襟へ挿したり。

銘仙の袷に、白襟、かすかに覗かせ、胸高に藤色の袴の紐を結びたる品格ありて賤しからず。

誰が目にも私立女學校の教師といふ格。

濃き髪をふつくりと流行の束髪に結びたるが、襟脚の美しさ、水も滴んばかり希らしい美人なり。

緩かに、芝生の上を何やら口吟みながら歩いて居りしが、女學生は其方を見るや、寄宿舎の影より手を繋ぎつゝ、

「まア。先生。」

と駆よりて、

「好い香ですこと。先生この花頂戴な。ね、」

一人の二皮眸の十五六なるが、慕はしげに覗きながらいふ。

「彼方に澤山咲てるでせう。」

「だつて妾。先生のが戴きたいわ。ね澤野さん！」

「さうねえ。」

對手もうなづけり。

「先生のお手に摘まれたンだと思ふと、妾、懐かしいンですもの、皆でさう申しますわ。溝畑先生に可哀がられるンならSにだつてなりたいわッて……」

「まア大變ですことね。一緒に散歩しませう。貴女方、大先生に逢はなくつて？。」

澤野といふ一少女は、ふりかへりて、彼方のゴムの木を指さして

「今の先、甲の組の方と、彼處に入らつしたわ……御用なら、捜して參りませうか？」

十年前、母の臨終に、悲しき遺言に接したる小枝子は、女子教育者須藤綾

子の塾に入りて、教鞭を執れるなりき。

一生歸がず、之かず、神の命じたまふ傳道に其身を捧げて、靜かに其生涯を孤獨に送らんとせり。

廣き校舍に生徒は散じて、なほ、初夏の餘光は、たゆたひながら、庭に殘影を横へたり。

燃ゆるごとき夕日を浴びながら、校主の綾子と小枝子は、青芝の上のベンチに腰を下せり。

「そりア、貴女が左樣いふ決心であれば、それ程、嬉しいことは妾無いンですけれどもね、女性の獨身生活は不自然だわ、母さんは、何ういふ意思で、小枝さんにまで、獨身をお強いに成つたか知らないけれど、其れは、自分の境遇が餘り悲しかつたものだから、愛する少女を自分と同じ境遇に落すことを心配なすつたンでせうけれど、妾はまた左樣考へないの、女は矢張り、年

頃には、結婚するのが可いと思ふわ。」

「左樣でせうか、けれども先生、妾は、かうして貴女の事業に獻身して、其で十分の愉快を感じて居るンでございますもの。或は天理に逆つて居るかも知りませんが、妾さへ、かうして清い生活に甘んじて、何不自由なく、愉快に暮らすことが出來ましたら、其れで可いと存じますわ、夫より、妾これから、音樂の方ね、あれを一生懸命にかゝつて、立派な音樂者として成功したいと思ひますの、貴女は何う思召します？」

「西洋などでは、女性が一生、獨身で、遙々と他國へ出で、傳道などして居る婦人が澤山ありますが、決して陰鬱な、厭世的の人ではなくつて、男子の交際社會へも入り少しも社會の文化に遲れず、愉快に生活して居ますが、日本では、其樣いふのが少いものですから、世間からも、年頃に成つて獨身で居ると、色々と云つて、折角の事業でも妨をするといふやうな傾ですからね、

併し、もし、貴子が母上の遺言を守つて、一生獨身で、妾と一緒に、事業を經營して下さるならば、それは妾、これほど嬉しいことはないけれど、其で無くつても少しも不快には思はないの。何方かといへば、妾は却つて貴女の結婚を推奬するンだわ。アラ、小枝子さん、笑つて……。妾本氣で云つてるのよ。」

「妾、ちつとも結婚なんか……一生、先生のお傍に居て、樂しく暮らしたいです。どうしても妾のやうな、最初から薄命なものは、將來だつて、世間の人の樣に幸福を現世に求めることは出來ない運命を擔つて生れて來たンですわ。ね、先生。」

「妾は、人間の樂といふものは、平生の心掛けと信仰とに依つてゞどうでも變化するものだと信じて居ります。世の中には、尼に成つて、無理に、青春の氣を抹香のうちに沒して了まつて少しも悔いない人もありますし、旅行ばかりして一生を暮らす人もございますものね。妾は、婦人が獨身で居るの

は不自然だ。きつと墮落するといふのは神樣をも信じない不信仰の人のひふことだと存じますわ。お酒飲みの方が一朝、不圖した動機で、杯を抛ちますと、最初こそ、少しは、淋しくて物足らぬやうでございますが段々慣れて來ると、酒と聞いても頭痛がする位だと申すことを承つて居りますが、何事でも、氣の取り方一つで冬の眞央に氷庫に働いたり、夏の最中に、火坑のうちに埋まつて居ても、少しも寒いとも暑いとも感じない、と申すぢやございませんか。」

「理屈は理屈、貴女の仰有るのに相違ないけれど、女性が結婚したつて、別に天に對して濟まない譯でも信仰を墮した譯でもないんでせう。」

「もう其樣な話は止して下さいましな。妾は、最う先生のお傍で一生暮らす覺悟を致して居るンですから……」

綾子もはじめて心づきたらん樣にて

「さうでしたね。いつかも、最うこのことは申さない約束でしたね。貴女の美しい姿を見ると、何だか、獨りで、かういふ生活に老ひ朽ちさしめるのは惜しいものだと思ひまして、つい〳〵われ知らず、貴女が厭がるのを忘れて又出たのよ。」

この時、扉の披きたる氣色、ぱつと一道の光線は、室内の人を照せり。

二人は思はず、話を中斷らして、其方を顧れば十六七の女學生風の小女が、置ランプを手にしつゝ、入りもせず、戸口に佇めるなりき。

「先生、お燈火を持て參つても可しうございまか？」

「マア、櫻田さん。妾、貴女が何か云つてらッしたのに、返事しなかつた事？」

小枝子は頬を赤うせり。

「何だかお話の最中でございましたから、妾こそ、失禮いたしました。誠に失禮を……」

「可いことよ。今ね、小枝子さんと、大變な内秘話をして居たの。貴女聞かなかつたの、惜しいお話だけれど、貴女だけには聞かして上げたものを……ね。小枝さん。」

「あら、先生が……。お燈火を置いて參ります。」

女生徒は、靜かに、廊下に出たり。

宵月の影は、碧の葉ごしに青く庭に落て色白き小女の面雪のやうなりき。

寄宿舍にては、自修室より、誰が彈くにやバイオリンの音す。

小枝子が母に先たれてより早や十何年の星霜を經たりし小枝子には例の鎌倉の孤兒院主須藤綾子の許に敎育され今は母の遺言を守りてこゝに聖き敎育事業に從事し居るなり。

（三）

道念高き孤兒院長と、趣味深き孤兒とが、燈火の影に、未來を談じ、信仰を論じたる。昨日のやうなるが、若葉の雨も老ひて、麥田刈るころに成れり。

小枝子は不圖したる病の牀に伏してより、頭上らず、一時は、熱四十度に近くして、時々は、囈語を言ふやうに成りしが、いつしか病魔の威力も減じて、起居も自在となりしより、或る時は海濱に貝を拾ひぬ。砂に座して波をも見ぬ。

されど、校務の心にかゝりては、病の身に在るを忘れて、教堂に立たんとするを綾子は氣づかひつゝ、強ゐて彼女をして、前島夏子といふ一女生を伴はしめ、伊豆伊東の東京館に保養の客たらしめき。

一たびはこれを拒みき。されど、綾子は、無理やりと彼の女を、溫泉に送れり。

去るものは日に疎く、朝夕の眺めに慰められて、小枝子もやう〳〵謙倉なる學校のことも忘れたらんやうに、夏子と四邊を散歩しつ。

亂雲の峰に横ふる天城の夕空、星を尋ねては、花さく堤に遊びぬ、即興の歌など口づさみつゝ、或時は、海遠き波を帆影に眺め入り、或る時は小山麓の水車小屋にも遊びき。馴染早き里の人の、二週間經たぬに、顏見識多くなりぬ。

今日も、伊豆山に故跡探るとて、二人、冷川峠の阪路を歩みき。日霽れたれば、はるかなる大島の烟り、空に靉き、風に縺れて彷徨なり。彼處ぞ、椿油の產地なる。と小枝子の語れば、石に踞して、醉るらん樣なる眼ざしにて夏子は、ある人の紀行文にて讀みたる牡丹大の大水仙咲く地は彼方かなどいふ。

右は、谷深かく、昨夜の雨霽れ、氣蒸して雲低迷し、蓬々として、龍騰せり、横須賀あたり、空は紫にはれたれど、雲冠せる天城、未だ眠りより覺

めず。身に沿へる草木、風に小揺ぎて、梢の戰ぎ、戟を立てたる樣なるに何處ともなく、夏の匂ひ來りて、小枝子も夏子もしばし言葉なく、この自然の美を眺め入りて魂蕩ゆくに似たり。

「先生。」

「何？突然に吃驚したわ。」

「妾かういふ靜かな山の中に來ると、國の事を思ひ出します。丁度、この冷川峠のやうなところにね、妾の母の墓がございますの。」

夏子は泌み〴〵と物語らんとす。

チリン〳〵と小脇の阪路、鈴の音して、里へ炭薪賣りの駄馬の一行、赤き手網曳けるは皆女なり。

「田舍の事は思ひ出すでせうね、でも、故郷のある人は幸福だわ。」

「さうぢやございませんの。妾達のやうな、不幸なものは、最う寧その事、

故郷といふものがない方が可うございますわ。

丁度ね先生。

この冷川峠のやうな峠が……さうですね、最つと高い、大きい險しい峠で す。其の麓に妾の家がございまして、其處で、妾はいつも、母樣に手を引かれたりして、散歩いたしましたンです。かういふ陰氣な淋しい日には、屹度思ひ出しますから、妾、斯麼いふ日は、ほんとに泣き度くなりますの。妾の母といふのがね、非常な神經質で、いろんなことを申しますの。そのたびに眼に涙を一杯ためて、淋しい世間だよ。と申しましてね。じつと妾の手を握つて（夏や、お前、妾のいふことをよく信じて聞んだよ、かうして、お前と話して居る間にも、妾は、生命を削られて行くのだ。お前と何時離れて先へ行くかも知れないの）と云つてはら〴〵と涙を零しましたの。妾、其れを思ひ出すと最うこの世の中が厭に成て了ひます。」

二人は顔を見合はせて撫然たり。

冷川峠の中腹は、伊豆、駿河の境にありて、見渡す限りの海原と、顧望すれば迫る山の勢の峻嶮なるとに界せられたる地に、二個の影の、地上に印されたる時、鈴の音しづかに馬の下りゆきし後は、寂寞として四邊に物の音なく、里へ渡りゆく鳥の何か知らねど、一聲高く餘音を中空に響かせて飛び去りし跡を、二人は思はず、打抑ぎ見て、

「何といふ鳥でせう、よく妾の國などで、夏のかゝりなどによく鳴く鳥ですの。その聲を聞くと子供の時……妾は、子供ながら、何となく胸の迫るのを覺ました、如何いふものでせうか。何かにつけて妾は涙脆いのですものね。」

「幼時の幻影といふものは、何時でも記憶を喚び起すもので、西洋の詩人が、過去は故郷の幕の樣なもので、いつ逢つても親しい氣がする。」と云つたのは、事實ですね。夏子さんばかりでなく、妾も、種々幼い時分からの事を思ふと、

何だか悲しく成つて來ますよ。

かういふ靜かな境に身を置くと、自然、昔の影が自分の周圍にくる〳〵と輪を畫いて來ます。それが種々の形に成つて、神經を刺擊するといふものです。餘計に、苦しい過去を有つて居る人ほど、いつしか溫潤に角の取れた人物に成るといふのは、此處です。何事にも同情が十分あッて、經驗は人をして聖のやうにならしむとは此處ね。自然！いつも其形の改まらぬ自然の前に立つと、他所で假象された或る事實が、此似た形に寄托して、それに孕まれた昔の問題が、新たに妾共の眼に入つて來るのですね。貴女がこの冷川峠から、百姓家を見たり、犢牛の聲を聞いて、直ちに田舍を思ひ出すやうに、妾は、この始終渝らざる自然の美に接すると、何處か心の底に、物足りんやうな、薄命らしい感が、全身を支配して、泣きたくなるの、思ふ存分、一遍誰も居ない時に、大聲を上げて泣いたら、或は此麼悲しい、物足りぬ、何物でも慰

め得られぬ感が除却はすまいか。と斯思ひますけれど、さうも行かないものだらうね。」

「先生も其樣なことを？」

「妾？。この頃始終かういふことを考へる習慣に成つたのよ……」

「妾も實はね、今先生の仰有つた樣な考が起ると、起つても居ても居られませんよ。理屈や常識で支配されない一種不思議な事でございますね。」

小枝子の眼は、熱心に、夏子の面に打そゝがれたり。

見る〳〵日は、天城の峰の雲を拂ひて、先刻より見れば、澄みたる哉、大空。青き雲帳をはり、二人が座せる青芝の上に、羽がい弱き蝶一つ、風に弄られて翻々と、花を尋ね飛び迷ふなり。

心にもなく、其方を一心に眴めたりし小枝子は、思ひ出せし樣にて、

「世間には、よく世の中が滿らない。あゝ最かういふ世の中なンかに生き長

らへて居たつて滿らない！といふ人もあるが、妾は決して左樣は思はないのよ。一體、世間の人が何の爲めに生きてるの。なンかいふのが間違ひで、何の爲め？と其の樣な理屈で生れて來たのぢやアないでせう「生きて居るといふ趣味」が、樂しみで、其の趣味を讀んで樂しむんだわ。其の趣味を、心に求める人は、神の境に向上し、物に需める人は、物質に執着する。その爲めに、うか〳〵と暮して居るンぢやないでせうか？「夏子さんなどは、まだ妾より年が下だから、畢竟、一年でも二年でも、餘計に、趣味が味つて行けるといふのです。それより外に妾は、人世問題の解釋はないでせうと思ふ……」

之を聞く夏子の眼は活々して居るが、底に鬱陶しい色が漂ふて居る「ですけれど、先生。「人世」を批評する丈けの餘裕があれば、それは無論「死」といふ樣なことを考へつきはしませんけれど、妾は、世間には、非常に意思の力が弱い爲めに、隨分、當面の出來事に、心を奪はれて了つて、何の差別も無し

に、あゝ、苦しい。最う死んだ方が可い、と、冷靜な、墓の中を想像するのぢやないか、と思ひますの。左樣いふ苦しみ……死なければならぬ程の苦痛を何故默つて、打明け無かつたつて、親達が姉の死體か何かを抱えて泣く。だつて、其處に、死の美しいところあるンですものね。」

「その餘裕も平常の素養に依つて得られると妾思ふわ。あゝ辛い、悲しい世の中が滿らない……次に死！これぢやア全く臺なしだね。併し、夏子さんの仰有る通り、人生の悲觀者といふ側に立つと、巧くこの大切な關所を切り拔けることが出來なくつて、生理的からでも、死を愉快とするやうに成るンですね。」

「妾の母なぞは其一人です。精神病は遺傳する相でございますが、妾、其れを思ふと慄然として、身の毛が戰立ばかりでございますの。

母がね。始終斯樣いふことを申して居りました。

「實歷談だ相でございます。」

「何だか、變に寒く成つて來たね。」

小枝子は打顫へり。

日は、勁き光を地上に落し、鬱蒼たる森、林、草、活氣滿々として、日のいきりに燃え立つ生溫い、人醉はす樣な氣、二人をめぐれり。

小枝子は襟をかき合す。其顏の色も宜らず。

「御病氣上りでございますから、餘り、冷こい空氣に觸れちやア宜うございませんか知ら。」

「否、其樣ぢやないの。妾の僻です。悲しい話や、身に沁む話をすると、ゾツと胴震がするのよ。併しこれで非常に面白いわ、夏子さん、其實歷談といふのは何したの。」

ハンカチーフを膝にくるりと身を轉じて相正面せり。

（三）

「氣が塞ぐ、陰氣に成つて、窖へ入りたいと、始終云つて居たんだ相でございます。それだから、妾の母なぞも、（貴女のやうに左樣神經的では、仕方がない、もすこし氣をおほきくお持ちなさい）と云つてゐたンです……この方の御兩親も神經病でございましたが、矢張遺傳でね、祖父上といふのが大變な亂酒で、それが爲めに卒中でお歿くなりなすつたンです。母も病身でございましたが、其母が、八釜しく最少し氣を大きくなど申すンですもの。大抵想像が付くンでございます。病氣は久しい間肺で、日に〳〵痩せつこけて、遂には骨と皮ばかりに成つたのです、あゝ頭が痛い、死ぬ樣だ、と口癖のやうに云つてお出でなすつたンですが（最う死ぬンだ。早く死にたい）つてね。苦しいばつかりでもなく、全く、無暗と死神がついた樣なもので、人

目のない折に、三度まで咽喉を突きましたのですつて、かう成ると、常識といふものが全く缺乏して了つて、たゞ感情にばかり支配されるンでございませうね。最初の時は、創も淺かつたんですが、終には、氣管に達するほど抉つたのです。」

「どうしたンでせうね。其樣いふ風に成るものでせうか、病氣といふものは不思議なものね。」

と小枝子はまた〳〵と、夏子の面を見戍つて居る、

「母が左樣申しましてね、どうしても、妾は、あゝいふ死に方がしたくないと申しましたが……」

「まア、何うして？」と驚かれぬ。夏子は感慨に堪ざらんやうに袖を上げて涙を蔽へり。

「母の最後も、同じく自殺でございました（夏、夏、早く來て見ろ、）と。父

が申しました時は、白い夏蒲團に一面の朱、(母上母上!!)

とお手を取りますと、氷のやうに冷やかでございませう。(誰が及物を病人の目にかゝる處へ置いた?)など云つて、父が騒ぎましたが、後の祭でございませう。今の今まで、話をしてゐた人が、何故斯樣に、急にこの世が……と思ひますと、妾は、胸が迫つて、前後もなく泣き崩れました。

丁度あゝいふ白壁の家でね、大きな槻がございましたの、思ひ出すと、今だつて、其時の光景があり〳〵と目に見るやうでございます」

「其樣いふ貴女は悲しい履歴を御持ちでしたの?よくまア包まずに話して下さいました事ね。夏子さん、貴女も隨分悲しい目に遭つてるのね。」

「亡くなつた母の面を、妾はそつと慕ひ寄つて、ね、先生。蠟燭の火を挂げて、棺のなかの母上を……夜は更けて居ますし、妾は、父上が(千代。お前は短氣をやつてくれたねえ。)とまをしました時、何かは知らず妾は胸が一杯

になつて、ばら〳〵と涙を、青ざめた母上の面に零しましたの。

弱い火は父の横顔を照らしてゐますが、心が溜つて、パッ〳〵と瞬くのでございます。父上は、

(泣いたな。夏。確乎してくれないと困るよ。)

と仰有るその人が、眼を眞赤にして涙が一杯。

(俺ア泣かんぞ。が、な、夏、俺ア、神經病といふものは怖いものだ。と思ふよ。生きる道も癒る術も、お前、咽喉を切ちやアありアしないからな。)

(父さん、最う廢ませう、母上のお貌は、かうして徹夜しても見て居たいですけれど、いくら、未練を云つても、瞑たお目が開くぢやない、この唇は、またと紅うなりますまいし、悲しくなるばかりですもの。)

(うむ、左樣ぢや。諦めるさ。さア、夏棺蓋を閉るぞ!)

(も一遍……母さん、もうお目にかゝれませんのね、夏と一言ね、云つ

て下さい。）

と妾は一生懸命でございます、人は居ず父子二人が亡き抜上の棺をかうして泣き縋つたことがございます。

この當時のことを思ひますと何となく悲しくつて……涙が雨のやうに。」

と云ひさして、夏子は聲をあげて泣けり。天城の嶺、日は、霽れては又曇りつ。伊豆の海、其度びに、銀色となり、鉛色となりぬ。

人のかく山の上に悲むと知らで、船の中には、何をか人の語るらん、帆は輕く、水を滑べるごとくに東より西に、南より北に。

はしなくも小枝子は、その十年前のことを憶ひ起しぬ。嗚、その哀れなる記憶！

「夏子さん、最う止しませう。また天氣が少し曇つて來相ですから歸りませう。ね。妾、何だか悲しく成つて來ましたわ。」

「妾、先生に濟みません。こんな勝手なことばかり申上げまして。何だが獨りで考へて居ると、悲しくて胸が裂けるやうでございますから。今日は久し振りで、胸がすつといたしました。」

「妾も、貴女のことを聞と、他人の事のやうに思はれないの。妾は、貴女がさういふ悲しい履歴があるといふことを少しも知らなかつたのです。これからね、お互ひにこの淋しい世の中に立つて、便り會つて行きませうね。」

「有難うございます。斯して、世間から見ると不幸な一人であつて見ますれば、妾は、世に便にする人がないのを、どれほど悲しう辛く思つてゐませう。どうかね。先生こんな厄介な妹も一人有つたと思召して、この後とも、更めてお目をかけて下さいましな。」

「そりア師弟といふ關係を離れて、かうして、身の上の話をするンですもの、何だか前生から約束があつた樣に、妾懷かしくつて堪らないわ。そして

ね、夏子さん妾も貴女と同じ様な運命を有つてゐるンですけれど、今日は何だか胸が迫つて、悲しく成るから……」

二人は、冷川峠を下りて、静かに、伊東の市に向ふなりき。

見よ、小枝子も沈默の人となりき、夏子も足取悄然として、その静かなること羊のごとく、人は、回顧、幻想の擒となりて、互ひに其影を惜しみながら、いつしか、その優しき姿を、堤の水車小屋の前に横へたりき。

繪のごとき小山麓の水車小屋のほとりに、二人は、なほ何やらん語ひながら來れり、

「先生御工合は？　餘り山の上の冷つこい空氣に觸れたので、お障に成りませんか知ら。と妾心配で堪りませんわ。」

「否、今日は面白かつたこと、妾あゝいふ話をすると、身に沁みて、どんなに深く感じたでせう。」

小枝子は、母が臨終の夢のごとき過去の感を今更繰り返しながら、足のいかにして運びしやを忘れたらん狀なる。

「あれ先生、誰だかバイオリンを。」

「さうね。誰でせう。こんな静かなところで、あの音も非常に可いものね。」

夏子は、バイオリンの音を追ひて、其彈く主の如何なる人やを究めんとするなり。

夏帽子の影ちらと水車小屋の彼方の木蔭に——見れば年若き學生らしき青年の、床しや、この逸興忘れがたしとのやうに、無心に、バイオリン彈ずるその傍に、洋犬の太く逞しきが、青年の膝に首を載つゝ、夢路辿れる樣なる。

「あの方ですよ、先生！」

小枝子が其方を一瞥せんとする時、彼方も人の氣色に驚きたるがごとく、

面をあげ、小川をへだてゝ、二人の立てるを見て、ハタと絃を摩する手を止めつ。

洋犬は、むくとばかりに起き上りて、身構したり。

小枝子は、その大學生ならんことを推しつゝ、さして深くそを探尋せんとも期せざるなりき。

夏子は、近來頻りに男生間に音樂趣味の普及せしを云ひやがては女性の特長は男子に奪はれ、女子は男子の職業に代りて、男らしき女、女らしき男の混戰を見るべき世の傾向の不思議なるを可笑しとて、輕き調子にて面白げに語りぬ。

「さうかも知れませんね、今に女代議士も出やうし、女の大臣も出來るでせうね、去年の議會に、女子の參政權を云々した婦人の建言書がございました樣ですが、妾あんまり突飛だと思ひますわ、勿論女子だつて、昔のやうにい

つまでも、男子の頤使に任じて、一分の主張をすることの出來ない奴隷生活の卑屈な境界から脱し得やうと只管に希望するのは必要ですけれど、女子はまた女子として發展する道も主張する道理もあるンですからね。」

「さうでございますとも。あの女子の參政權だの何だのと、全然女子が社會の人として立つのは、今日まだ其時機ぢやなからうと思ひますわ、ね、先生。」

「時機問題ぢやありますまい！いつまで經つても、女子は女子の本分として家庭の人と成つて安ずることが出來ねば可けないと思ふわ。」

夏子は深く肯けり、

日は青々したる籬の繁り葉に流れて、青き影、地上に流れ漂ひつ。

唯、バイオリンの音の主の高き好尙の小枝子は男學生間に流行しつゝありと語らひて家路につきぬ。

晝の支度出來居たれば二人はまづ湯にとて溫泉の烟るあたりに打ち伴ひた

り。

この水は、冷川峠の東北方の山根より流れ出でゝ、この家のはいと澄みたり。小川には滿ち漲るまでに流れ渡れど、かゝる溫かき水の底に魚はなほよく生き得るや、と語りて夏子に笑はれしより、旬日の滯留、體に叶いて、全く病を忘るゝまでになりたる效驗を今更ながら感じながら、われにもあらで心は鎌倉の女學校なる恩人の傍に飛べるなりき。

人は孤獨といふ、この生涯に、溫泉のごとく、われに溫かき慰藉はありや。

この脂膩ぎつたる肉は枯れ、瘠せて薄の如くならん。人の情もまた然り、單りこの山清水の鑛氣のみは、何人にも溫かき力と愛とを與ふるものならずや。……

夏子も何に思ひ耽るらん。岩より迸り出づる溫水に、玉より白き掌を翳して、樂しげにほゝ笑めるなりき。

「流しませうか、夏子さん。」

「あら勿體ない。妾……、恍惚して居て、……先生、お肩を流しませう。」

「可いことよ、かうして、獨り、うつとりとして溫泉に溶けるやうに身體を浸して居るのが何より藥です。妾、溫泉場の保養は、思ふことなく、憂ふることなく、かうして、心長閑に、夢心地に成つて、蕩けるやうに溫まつて居るところにあらうと思ふわ、そりア、氷そのものに藥もあるのだらうけれど……」

「くよ〳〵と心配して居ちやアどんな名醫の藥だつて利かないでせう。」

「衞生學だとか、生理學だとか、六かしいものより、其方が眞理よ。」

「又一つ學問いたしましたわねえ。」

二人は相見て笑へり。

湯を上れば、女中は急がしく小枝子の室を覗ひ、夏子へ宛てたる電報を手

渡しぬ。

夏子は、其れを讀み了りて、

「先生、横濱の叔父が病氣だ相でございますから、妾に歸つて來いッて申して參りました。」

「さう、直ぐ支度して出掛けることになさいまし。外の事ではなし、御病氣といふのは氣がゝりだわ、船の都合は何ぢか知ら。」

女中は旨を銜みて下りゆきしが、やがて

「十二時だ相でございます、まだ一時間ばかり時間がございますから、緩乎お支度なさいましても大丈夫でございます。」

「ぢやァすぐ御飯をね。」

小枝子は、共に歸らんといふを夏子は强ゐて止めたり

「まだすつかりなさらないのに、無理なすつちやァ折角、其處まで成つた

のが跡戻りをいたしますから……」

「大丈夫だと思ふけれど……」

「どうか左樣なすつて下さいまし、妾も先方の都合で又引還して參る積でございますから……」

「ぢやァ待つてますよ。併し、伯父上の御病氣が第一ですから、充分お世話をして上げて下さいまし、妾、病人と聞くと、本當に人樣のことでも、自分の樣に思つて……」

「妾も病氣は大禁物！何遍も人の死に遭ひますと一寸したことでも氣怯れがしまして。」

其中に、午飯の膳は二人の前に配せられぬ、

夏子は、唯一の親近者なる伯父上の病を思うて、食餌も咽喉に下らぬなりき、なほつとめて、氣を勵まし、左あらぬ體を粧ひて、しづかに支度を整へて、

「ぢやア先生、屹度待つて居て下さいましな、すぐ歸つて參りますから。」
「併し、此方のことは、左樣心配して戴かんでも可うございますから、伯父上の御病氣を十分看護して上げて下さい。ぢやア妾、濱まで送りしませう。」
「どういたしまして……どうせ車でございますから、心配はございません。」
「だつて大事の妹だもの、車夫などに任せないわ、あのお吉(女中)さん、妾にも車一臺命つけ下さいな。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

やがて二人は、車を聯ねて伊東を出でたり、
當面の天城山、よく晴れて、翠色滴らんとす、
夏子は殘り惜しげに二週間の舊栖處たる後方を見かへれば、門の柳風に靡きて烟に似たり。

(四)

友に離れたる寂しさに、小枝子はまた瞑想しては、夢幻より昔のことを辿りつゝ、われながら、自から置かれたる人生の、いかに薄命なるやを思ひ惑へり。

人は面華やかに笑聲さへ冴えたり、自づからも世にいふ愛嬌ある方にて、かの厭世、不平の徒のやうなる憂愁のわが心の底に横はれりとは思はれず。

さはいへ、決して、幸福にてはあらざりき。しかく考ふることの自づから不幸の地に在るを自覺しては、いかにもしてこの人生の桎梏を脱せんと願はざることを得ざりき。溫泉に入るごとに、水は滑らかにして、膩と柔かき上に、わが美しき小枝子は、獨り寂しく、硝子越に青山を見たり。語る友なきに、自づから湯槽に身を寄せて、慨げなる樣なり。

折から、忙がしく廊下を駈け足の、扉を開きたるものあるに、驚ろく此方より彼方は、

「ヤ、失禮!!」

と叫びて、躊躇へるなり。

何物の狼藉ぞ。と咎めもすべき小枝子なれど、不意に驚ける彼の狀の寧ろ氣の毒に思はれて、此方よりこそ、極り惡げにさと顏を赤うしぬ、

「どうも早や……誰もお出に成らんかと思つて。どうも失敬いたしました。」

「否、妾こそ……」と要領を得ざる返答して、小枝子は、面を背けて、湯を出でぬ。溫かくして、靜かなる日は、窓より射して青き日の影、石壘の水に漂ひつ、その輪の旋轉しては、小さき光、天井に映ぜり。

誰見る境にもあらず、男も、引返すこと遲れて、度を失ひたり、女はもとより、その樣何とならうすべて羞らひの色あり。

小枝子は、身を反し樣、靜かに雪のやうなる脛をあげ、白き手拭にて、踵を拭かんとして、その眼の閃めきに、この青年のさきの水車小屋の傍にバイオリン彈ぜし大學生と悟りつ。彼方も、肩先まで流るゝ清き溫泉に浸しながら、見るとはなしに、小枝子を見たり。小枝子にはこの不意の珍客に、輕き會釋なくては、身を全く戸外に脫し得ざりし。

「お先きへ……」

「イヤ。どうも……」

二人は相對せり。而もこは一分時。小枝子は、鏡の前に立ちて髮を理めぬ、青年は仰ぎて、ガラスの蓋せる小窓より青空を見つめき。

鳶一つ輪を描きて、美しき聲にて歌へり。

小枝子は寂しき中に二日と過ぎぬ。夏子よりは伯父の病怠らず、こゝ二三日は手離しがたし。冷川峠の朝嵐。母が最後の涙を濺ぎしわれは、再びまた

天城山下の家に、わが舊恩人の死を語り合はねばならずと云ひ越しぬ。

人の上とも思はれず、この頃頻りに小枝子の胸に去來する人生觀は、この「死」なる語又いかに深く胸の扉を驚かしけむ。見るともなく、窓外を見れば、天城曇りて、灰のごとき雲、伊豆の海に流れ、溯黑うして沖を行く汽船は、木の葉より危うし。

きのふより下の間の騷々しとて隣の間に移りし大學生は、これも徒然に、バイオリンを又彈きぬ。小枝子は、自づからこの技を嗜めば彼の彈く音のあまり巧ならぬ乍ら、擦絃の强うして、耳立つを除きては、法度調諧に叶へる彼を全く拙なりとは云ひ得ず。これ獨りこの閑居の寂寞を慰むべき唯一の娯樂なりけり。

そと聞く耳立てぬ。われにもあらで、廊下に出でたるなり。

敏くもその音を聞きたるにや、内なる樂器は確乎と其絃音を止めたり。

惡しきことをしたり。と小枝子そと踵を旋さんとしつる折、聲はその背後を趨ひぬ、

「溝畑さん。」

「あら。妾、あんまり好い音がいたすものですから、つい立聽いたして居りました。」

「お入り下さい。徒然なもンですからあんな拙い藝當で、人樣の聞いて入らッしやるのを耻ぢもせずに……鐵面皮でせう。お構なくば、お茶を入れますから……」

下女を呼ぶべく、彼は手を拍ちぬ。

言ひ遁るべくもあらず、又さまで避けんとする要もあらねば、小枝子は、

「ではお邪魔いたしませう。貴方、樓下の座敷とは、見晴があつて、宜うございませう。」

「全で別世界のやうです。自然に渇えて、態々、この伊豆まで來て、樓下の陰氣な室へ投り込まれてちやア、臺なしでさア。これでやつと氣が落着きました。それに下の座敷に厭な客が來まするなア。客の多い……何でもこの邊から出た紳士で、地方人に馴染の多い樣で……種々な連中が來て、頭痛のするやうな儲け話しで持切ですから堪りません。」

「妾等は賑に成つて何より結構でございます。」

小枝子は華やかなる笑を會話の間に投じぬ。

「音樂は僕の嗜好といふよりは、惑溺です。下手の横好き以上、僕は、溺れる程面白く、興味を感じるのです。但し、御近所の御迷惑樣です。」

「否、妾も音樂好きで、貴方以上の溺愛者かも知れません。」

「バイオリンは？」

「バイオリンも、ピヤノも、貴方、琴も、三味も興味は人一倍感ずる方でご

ざいますの、併し、いづれも生り半弱で、達したものはないのですから……」

「何時か合奏して戴きませう。」と大學生は得意らしき滿面の笑を傾けて

「一體、今の學生は、柔弱だ、などゝ、世間で、吾々を攻擊するのですが、社會が御維新前のやうに、戰場のやうでは、風流も何も入つたものではなく、皆政爭兵亂の中に埋ひられて了つたものですが、今日は既にさういふ時代ぢやない、秩序的で、分業的で、趣味多用的に成つたものですから、自然、諸方面の天才が、今後の日本に出世しなければならぬ。天保時代に發見せられなかつた一種の新生活……さうです、新生活が吾等の前に開拓せられたと云つて可いですね、その天才の苦心の痕が、或は音樂となり、美術となり、文學と成り其徑路を辿つて、われ等が趣味の分配に與ることは太平の民として、非常に愉快に感ずるところではありませんか。」

「さうでございます。妾はまた、その天才の出現を待たねばならぬ今日の日

本が、まだ舊習慣の惰力に壓せられて、空しく新芽の發達を抑壓してるのではないか。と思ふほど、社會は一本調子と、理屈的で、面白味のない主義を奉じて居るやうで、これを思ふと、貴方の樣に議論を持つて入らつしやる方が澤山あるのは、甚だ心强いことでございます。」

「イヤ、左樣云はれると、赧顏の至りですが、全く天才の尊敬せられない時代ほど國家に自覺心、自尊心のないものはないと私は平常主張してるのでございます。あハゝゝ議論好きなもンですから……我田引水の見かも知れませんが……」

大學生は、橫にある煙莨入より、シガアを一本抓めり。

（五）

月淸き夜なり。黑川の流れて海に注がんとするところ蹟黑く、水白うして、

早咲きの月草は、人の裳に香はんとす。

四顧人の影なく、波寄せ際の磯臭さき風面を吹くところ、一橋は、夢のごとくに、陸と、沖とを繫げり。

伊東の街は、細く、亂杭齒と軒並あしく、斜めに、廣野の灯影、星よりもかすかに、一點、二三點、ありやなしやに輝けるのみ。

天城山のあたりに雲かゝりたれど、東は晴れて、月は澄みに澄みぬ。風あるごとに、夏の生り、軟らかに、たをやめの情に似て、朧ろに、微けく、人に覗ひ寄らんとはする。

忽ち蠢めくものあり、蹟より黑き軀を起して、橋上に立つや、細き影は流れて、明らかに橋板上に橫はりぬ。彼は高く笛を吹けり、次は、低く詩を吟じつ、往きつ、戻りつ、ステッキにて欄干を叩きつゝ。

沖には碇泊せる一汽船の眠げに、ボーッボーッと靜かなる海氣を驚せり。

「遅いなア。何うしたのか知ら。」

彼は、物の彼を聞くものありて、ゆかんとして往き得ず、去らんとして去り得ざるがごとくに、迷ひつ、疑ひつゝ、待ち詫ぶるなり。

何者かこの漢子をして、かくも、心迷はしめ、狂はしめつゝあるや。

月は、知らず、美しき自然の中にかゝる人の夢見心地を古往今來果して幾人をか照らせし。

「あゝ！」と屈托したらん、ごとくに彼は呟きつ、

「仰看ニ山上月一俯見ニ地上霜一、あゝ可い景色だ。」

彼はかく呟きつゝ、なほも南に歩みぬ、橋は盡くべし、情は、盡ざらん思ひなり。

「オイ、小原!!」

一青年あり、彼の肩を撲ちぬ。

「エッ。」

飛上りてふりむきし彼の顔は、蒼うして土のごとかりき。

「藤森君。何時此方へ來た。貴公も隨分酷いぞ。吾輩があれ程八かましく、手紙を出しても、やつて來ないなンか。獨りで淋しくて堪らなかつた。」

と小原は向きに成りて、對手を詰らんとす。

藤森の面には、冷笑の影漂ひて、

「寂しくはなかつたらう。僕は、却つてお邪魔だらう。と思つて、差控へて居た譯さ。あハ、、、、」

「可怪しなことを言ふね。君のいふことは、薩張解らん。君に似合はない。何だか奥歯に物が狭まつた樣なことをいふね。平常の間柄だ。若し僕の仕たことが何か君の腑に落ちんことでもあるなら、直言してくれても可いじやないか。ね、直言を。」

「勿論さ。直言もするよ。僕は、それを赤裸々に君に言ひに來たのだから。」

とくるりと身を翻しさま、藤森は、斜めに月光を浴びて、俯向きて脚下を見たり。

「一體君の病氣はどうだね。」

「僕は全然平癒した。」

「左樣か。そして更らにまた病氣を得た譯かね。」

「病氣？　凡談云つてやア……」と苦痛の色は、小原の面に滿てり。

「呆癡けたつて駄目さ。君は、まだ健全とは云へない、或は肉體の病氣は去つたかも知れんが君の精神には、バチルスが一杯だ。オイ小原。確乎しなけりア不可いぜ。」

最早問ふまでもなし、彼は的乎病所を指摘し得たり、小原の胸は、鼓動せるなり。

「あ。何の事かと思やア君。そりア邪推さ。全く邪推だよ。」

「推邪とは何かね。僕は、まだ何も云つちまやしないぢやないか。君は慥かに精神上の病氣に罹つて居るといつた丈ぢやないか。問ふに落ちず、語るに落ちるとは君の事さ。併し全く君は親友たる僕に、君のこの頃が、立派な平常の小原朗である！とは斷言出來まい。まア、固くろしくいふのは止さう。月光靜平、江に滿つた。君、火を一つ貸したまへ。」

とはじめて和げる面して藤森は、小原に對せり。餘りに氣の毒なりと思惟たるか。

「僕は友誼上、君のいつも唱道して居る英雄主義を君自身に求めて居る、今の學生の生溫い戀愛論なンかにかぶれて、君が多年の愼嚴を捨てることは、甚だ心外で堪らん。さうぢやないか、小原。僕は、君がさつき寂寞に堪へん。」といつたが、さうぢやなくつて、却つて吾輩の來たのが、邪魔に成る譯ぢや

ないか。」

友は、惇々と說き行かでは、心ゆかぬ樣なり。

「それで、僕は君が、不思議に上京の延びたのを大に心配して居た。君に限つて、其樣な人物ぢやない。安心だとは思つて居たが、もしや、婦人なンかに拘づらつて、青春一刻大切な時を無益に消過することがあつちやア、それこそ君が將來……少くとも吾黨の大事件だからね。」

煙草を地に捨てつ。

「僕は、この頃流行の男女交際なンかには絕對的反對だ。婦人……殊に、この頃の女學生なンかは、丁度、僕等の高等學校に居た時代のやうに、何事も空想ばかりして居るのだ。不健全な戀愛小說なンかに浸染して、知らず〳〵不潔な氣風を帶びるやうになるのさ、戀知らずして、過ぎたところで僕は別に、男子の不名譽にはなるまい、と思ふ。」

かういふことをいふと、今の流行子などは、愚論者とも笑はれるか知らないが、實際だよ。今の學生が戀愛などといふのは、重に、其美しい名を冠つて。實は、墮胎藥の厄介に成る連中さ。

君にかういふ心苦しいことを僕は言はうとは思はなかつた。

氣にかけてくれては困るが、全くだよ。僕は君の親友を以て自任して居る……で、な、君、怒つちやア不可ないよ。」

熱心と信實とは、彼の語氣に溢れぬ。

多く言はんとするところは胸に滿つれど、友が至情に動かされて、小原は默せるなり。われ自づからすら、何故にかく心亂れて、かつて沙漠の如くなりし寂しき伊東の空の俄かに生氣を得、彩色を加へ、見るもの觸るゝもの、皆悉く、わが若き血潮を煽つるものなるやを思はざるを得ざりき。

「僕は、君の忠告に對して、絕對に首肯することは出來ん、僕は自づから、

強き意思を抑制して、情の擒となりて居るものは信ずることを欲しない、けれども、僕は、何だかこの頃變な心持を抱いて居るのは、良心を欺くことが出來ん。」

「そりア、一婦人に關することだから。或婦人に戀して居るからだらう。」

「婦人？。」小原の聲は、少し顫へて居たり。

「婦人の爲めに僕は、精神を奪はれるまでに毫碌はしない積だ。」

「けれども、婦人の爲めに毫碌する、しないは別問題ぢやないか、僕は、別に君が婦人を友人にしたからとて、それを何うのかうのといふのぢやない、だがね、小原、怒つちや不可よ。」と一層聲を強めぬ。

小原は感謝するやうな語氣にて、

「怒る？あ……怒るなンて。僕は、謹んで君の忠告を拜聽するさ。」

「戀愛も強ち不可とは云はんが、君が戀しつゝある女性は、果して何者か？、

僕は、その人が敎育者であると聽いた時、君の決心が餘程確固としていなければ、獨り爲めに、君の個人を葬らねばならぬ運命に遭遇するのみならず、婦人の德操もだ。實際君がどうしても、その婦人と夫婦に成る決心なら可いが、でなくて一時の若い血が燃えて、戀した位のことなら、そりア君、一つ大に熟考すべき問題だぜ。」

その影に窺ひよる細き影あり。

（六）

小原は、友のこの諫言に對して、全くその誤解なるを辯ずるの勇氣はなかりしなり。われははじめに、小枝子を見たる時は、唯かゝる女性美に對する一點の注意すらも拂はざりしのみならず、寧ろ、小枝子の美しさが爲めに、幾分の羞しみを覺えたりし程なりき。

小枝子は、無邪氣にして、よく語りぬ。心に蟠るところあり或は又私かに期するところあるものは、笑むこと少く、語ること短かく、心中悶々として、常に何事をか語らんとし云はんとするがごとく見ゆれど、小枝子にあっては、かゝる風微塵もなく、よく笑ひぬ。よく論じぬ。

小枝子のいつも問題とするところは、女子教育に就いての自家の經驗談なり。

教育に就て小原は、一個の見識を有せり。小枝子の爲めによき聽手となり又よき批評家となりぬ。

女性をして情の發育を阻害して、偏に理性の人たらしむるは、其結果如何。小原は、口を尖らして、これ吾輩の平生云はんとするところなり先今の女子教育の根本的誤謬を指摘するに躊躇せざりき。

見よ、今の教育は、男子に授くべき智理の方面を以つて、女性にも課せん

とするに非ずや。

婦人の最も至大なるは情操にあり。人情の泉、情感に觸れて、潤める暗黒より、流れ出づる一種の美なる發動にあらずや。

何事も理屈づくめ、すべてを杓子定規、一に一を加ふれば二、となるがごとき、一點の情趣を容れざる教育主義は、われ等の採らざるところなり。と常に眉を昂げて、若き學生は、時代傾向に憤るところありてのごとくと肩を聳やかしぬ。

この奇警なる言論は太く小枝子の心を動せりと見ゆ。その度ごとに、わが美しき小枝子は、燃ゆるばかり、はた薄けんとする瞳を若者の上に注ぎて、膝の進むを知らざらん風なる。

もとより友のいひしごときいかゞはしき交際にあらず、われ等のごとき淡泊にして、純潔なるをも、なほ罪とせば、男は女に口も利かれぬに非ずや。

小原は少し色ばみて

「僕は、決して、君の想像しているやうな不潔な……よ。君、安心してくれたまへ。」

小枝子は、小原を最初只音樂の友として交りぬ。若き男に物云はんこと流石に心咎めぬにてもわらず。もとより、心に恥づるところなかりしとはいへ。小枝子は、小原との交際の日を逐うて深く、遂には小原のことを思はでは、身は絶海の孤島に飄颻せられたるごとく心中の寂寞はほとんど堪ゆべからざるに至れり。

「戀？あゝ、われはもしや。」と彼女は自分を顧みたりし時、曾つて伊東に到らざりし前、一時も胸を放さゞりし神のことを、折には打忘るゝことありて、人間の慾望にのみ支配さるゝことを悟りて、襟を正うして、

「あ……何といふ魔か。」と自づから制せんと試みたること幾度なりしぞ。さ

れど、今は、われにすら、戀の擒となりて、深くそれに惱され居ることを信ずるに至れり。

竦然として身顫せり。

同時に幼き彼女の記憶は、期せずして畫よりも鮮やかに、明らかにその心扉を披いて到り、

「小枝子お前に遺言が……」と

半ば云ひざして、死の手に淡ひ去られし亡き母のありし面影の明らかにその眼前に浮ぶを覺えずはあらざりき。

「溝畑さん、何うか爲すつたですか？」

と小原は、靜かなる夕凪の伊東の海を眺めつゝ媚ぶるがごとくに、眼を聳てゝいへり、

「否、何も考へてやしません。」と

小枝子は、寧ろ、小原の眼敏くも、わが煩悶を覷破せるに驚ろきし眼を眴りたり。

「この頃は何だか變ですぜ……」

「何うしてでございます。」

「貴君は僕が藤森に貴女と御交際することを絶對に不可いと云はれた時そんな心細いことを云つちやア困ると仰有つたぢやありませんか。今では、僕の方より貴女の方が餘程心細くなりましたからなア。」

と嘯くがごとくに男は言へり。

二人肩を並べて歩みながら、心は、東西に飛ぶなり。小原はつとめて、小枝子の情を動かさんと試みつゝ、なほ、間際に投じて、搖ぶる如くに情を挑むなりき。

「溝畑さんのお説では、婦人が男子と共栖する——結婚ですね。それが罪惡

のやうにお考へに成つて居るのか知らんが、僕は左樣感じませんね。この間も、貴女は頻りと、聖書か何かを引いて、戀愛は罪だ。と一概に、この大切な若い血の動きを、罪の發動のやうに排斥せられるが、僕は、戀愛の滿足を得られる、ならば……戀愛の完たい最期を作り得て、爲めに相互が天の命ずる職分を盡し得られるとすれば、決して、それを惡むべきものではないと思ひますが……」

「其お説は妾には、承つても別に必要とも感じないことでございます。」

「左樣でせう。僕は僕が自由戀愛論を口にしたからつて、貴女を累はさうとは思はないです。議論は議論としてお聞きを願ひます。」

小原は、熱心に、燃ゆらんやうなる眼付にて小枝子に寄り添ひつ。

「貴女が左樣いふ嚴正に道德主義で入らッしやるとすると、僕は、かうして、お話をすることすら、非常に氣が咎めてならんです。一體、押開けてあると、

却つて罪はないが、離をすると覗たくなる習です。さほど嚴重なる道德の範圍内に、戀愛を束縛してゐらッしやる貴女が、かりにも男子たる僕等に、交際して下さるのは、その意味が今に成ると了解に苦しむのです。」

少しは焦れ氣味なる男のすべてを自づから規するところの理屈の下に小枝子をも律せんとするや、小枝子は、微笑して、

「妾に、道德觀がございますればこそ、男子の方とお隔なくお話が出來るといふ譯でございますまいか。

理屈づくめに、あゝだからかうの、かうだからあゝのといふ樣に、そんなことを考へて御交際するの、しないのといふことが妾には出來ないのでございます。全く貴方と御交際して戴くことも、妾の虛心平氣から願はれたものだと存じます。」

小原は夕空の薄き光をうけて美しき女神の石膏に似たる小枝子の面を見入

りて、その小さき唇より洩るゝ紅語を藻けんばかりの面相にて聽き入りたり。

小枝子は、生來未だ曾つて觸れざる人情の自然に會ひぬ。燃ゆるごとき紅情は、小枝子の全身を擁して、飽まで、其奔馳に任さんとはするなる。

「貴方が仰有るのは、妾が心に一の秘密のない時に、假令ば、若い男と女とが、將來夫婦に成る約束をすれば、擅まゝに、戀愛に陷つても構はない、戀愛といふものは、終さへ完すれば全く罪惡でない。との御議論でございますが、妾は、其理屈には服從の出來ない身の上でございます。」

「秘密？貴女の精神上の鍵は、其秘密故に、貴女の心自身すら解放することが出來ないと仰有るのですか。それは、弱い決心と言ふものぢやないですか。」

小原は熱したる瞳を見張りて、頻りに小枝子に楯を向けつ。

「露伴の「對髑髏」といふ小說の中のお妙といふ女の樣に、貴女は、何か親からでも、深く心の自由を封ぜられてお出に成るのですか、溝畑さん、僕は

青春の自由戀愛に滿腔の同情を表するものです。もし僕等が幸に……幸にしてですな、互に戀に陷るやうなことがあつたならば、その時は、僕は、非常の歡喜を以つて、その問題に中つて見る積です。道德を絶し、宗教を越えて、人間が最も甘美の熱情、純潔の思慮は戀愛ぢやありませんか。苦い顏をして、毒杯を仰ぐやうな、世間並みの道德論か何かに制せられて、戀の自由を得ないのは、甚だ心外ですな。吾輩のは、十分戀愛には突進主義です。」

小枝子は、この小原がわれを愛するの餘り、顏を火にして、この汀に立ち熱心に戀を說くを、靜かに冷やかなる瞳にて見やりながら、宛ながら、人の罪を敎えしエデンの園の蛇の饒語に似たるよ。と心の底に一種の震慄を覺えつ、美しき瞳を動かしもせず、その面は、浪に閃めく濱の砂の上にあり。

（七）

小原は、眼を閉ぢて、審さに小枝子の言を讀まんと試みたり。

彼女は、戀愛を罪惡なりと一圖に思ひ做せるが如し。知らず戀は果してかくまでに賤しむべきものなるや。

昔は牝鹿の血もてぬりし矢を慕ひては、牡鹿は尾上より獵師の災を忘れて近づきしといふなる傳說はいかに深く男女の愛の妙じき作用をか語れる。

世には、道德の外に、人の立つ道、人の行く道、たゞ〳〵人の人たる道なし。とやうに誤り認むるものあり。戀は、噴火の如し千萬層の積土の陰に潛めど、一たび發すれば萬貫の石を虛空に弄び、十里の郊原一夕にして、灰土の中に埋めしむ。この自然發作の威力に對しては、道德の能も、宗敎の力も到底何の用に立つべくもあらず、觸るゝもの悉く灼熱化し、紅情化して、やがて皆、自在奔放なる戀の盃の中に溶け入りて、戀の之くところ、戀の立つところ、すべて其軍門に降らずば已まず。熾なるかな。と、小原は、空

想の扃深くわけ入りて、獨り自づから迷ひの關の出づべき道を失ひし人のやうに、樂しみ、憧れ、また哀悲しさに涙を浮べて、しばらくは、死せるが如く、默然として、時の移るを知らざりし。

彼方の濱より、人の畑を燻らしながら此方に歩み寄るあり。小原は瞳を上げて其方を瞻視つ。

「藤森君！」

「此處か。頻りに探して居つた。又何か考へ込んで居るのだな。」

「イヤ、僕は、此間、君に與へられた宿題を今日は何うにか決し樣と思つて。」

藤森は、輕く笑ひつ。

「決斷かね長いね。躊躇逡巡の體かね、困つた人だ。其樣深く考へる程、段段、尾鰭が附くものだよ。簡明。簡短!!。其に限るよ。君抔は、かの問題を問題以外に重視して居るから面白くない、何でもない事だよ。」

「……。」小原は事もなげなる友の顏を見上げぬ、風は蘚を含みて、靜かに、野草の末を吹き靡かしぬ。

「僕は露骨に言ふよ。僕の鄕里で情死したものがあつた。最初は、君のやうに、戀愛の二の足を踏んで恐々ながら行つたものだ、それが、何時しか人の意見も何も用ゐない樣に成つて了つて、四方へは不義理が重なる、世間では善く言はぬ。爲めに、到頭身が塞つて命を捨てた。それまでに女は勿論幾度も回顧したのだ。男の方でも、女を疑つて、斷念せうと思つた。ところが段段深陷りをして、二人共、死なうとした時は、愛情は消えて居た。が無理に情死と情死した。君等のも全く左樣だ。戀に戀をして居るのだ。

空想だよ、全く君等のは、情死と情死する連中だよ。呵々！」

と藤森は、其常識を以つてすべて戀愛を否定し、小原の回顧を促さんとするなりき。

「僕は決して迷ひはしない。君の忠告は、有難く受ける。だから、君も安心して、面白く伊東の景色を見て行つてくれたまへ。

箱根へもお伴せう、僕は斷然あの婦人の事を斷念る。許してくれたまへな。」

「許す……許も何も無いぢやないか。僕は君が平生、吾黨中で、意思の強い、勉强家の君が、女色に迷うて、一生を誤るやうなことがありアしないか。とそればかり案じるのだよ。

近頃流行の戀愛小説の材料に、わが小原君をモデルとせられるのは甚だ遺憾だからな。」

「解つた〳〵。僕は決して君の其好意を忘れはせん。」

「それに僕はあの婦人に就て、非常に考慮を要すべき問題に觸て居るのさ。」

思ふところありげなる小原の語に藤森は、黑き瞳を見張りね。

「君は、あの溝畑といふ婦人を、通常の女性のやうに解釋して居るか知らん

が、僕の考へではあれは、何か深い秘密を有してゐる婦人に違ない。僕の方で、或は、僕等の心狀が或は所謂戀愛ぢやないか？と思はれたのであつたが、彼方では一向相關せず焉で、至極無邪氣な交渉をしてゐるので、僕は非常に恥たよ。全く無邪氣な、子供のやうな婦人だよ。」

「無邪氣？こりア大變に無邪氣だ。娘らしき無邪氣は當にならんよ。誰れでも、最初から戀に陷ちて居るとは思つてはせんが、段々變に成つて了ふのだよ。

無邪氣といふ奴が宛に成らんて……君用心せんと無邪氣に蝕れて、命を取られるよ。女には、一種の魔力……その所謂無邪氣といふ利益で……矢張り、若い男と女とは、俗にいふ『張りつこ』をして居るのだね。これを上品に云へば戀。下品に云へば惚れ合ひ……乃至は、野合……」

「野合！こりア酷論だ。」

「或は酷論かも知らん。が、嬌羞といふもの、底には、錐のやうな鋭い『當て身』があるものだよ。その錐の先に貫れぬやうに用心が第一よ。用心々々。火の用心！」

と藤森はマッチを擦りぬ。

「君サッポーを見たまへ。彼の戀は、最初はあゝいふ美しい空想的のものぢやつたが、戀は蛇のごとし、何事をか企まずば已まざる波瀾の中に情味を覺えるもので、僕は戀愛哲學を講釋する譯ぢやないけれど、まアそんなものさ。だから、今一思ひに君が何の事つたない、あの婦人のことを忘れるのが第一策だね。」

「勿論さ！僕はきつと君の論に從つて、今日までの夢を掃ふ積だよ。」

「夢！見たまへ。夢見て居た。と思ふことが既に、平生の心懸より遙かに、飛び離れて居つたのだ。また到頭戀愛論に成つて了つた。」

(八)

夜は全く伊東を鎖して、雲深く月光を蔽ひ風に煽られて、雨は、冷川の峠を掠め、餘勢は瀾と流れて、虚空に亂れ、沫繁く、東京樓、嵐の中にあり。

内には、二三日前、鎌倉より轉地せしといふ四十餘歳の八字髯と、其夫人にや色艶すぐれず、美しといはんよりは、凄しといへる方中れる一婦人の、笑ふ度に、金の前歯燦々と光り、鼻尖りて、常に何事をか物思ひ煩らへる樣なる福々しき一少女を携えて來り投ぜしあり。三人樂しき家庭をこゝに構えて、自然の寵に浴せんとする心掛ありてにしては、いかにも、其生活の狀の餘りに、暗情に過ぎ、泊味に流れ、打見るところ、其夫妻なる人の、各自、空洞に座して寂しき人生に牢居しつゝあるかの如く、其間に處して、左右顧盼に憂を知らぬ幼きが氣を兼ね顔に、瞳自づから敏く、折々は、獨り、樣側

の柱に凭れて、夕沈づむ雲の燒たるを瞻望む時あり、或は、母に伴なはれて、野徑の蔭を歩むにも、自づから心措かれて、母の沈默と沈深とを破らざらんと、ぬき足の、小羊に似て、草を踏むにも、心を配りつゝあり。

小枝子は、靜かに、其樣を覩て、如何なれば、かくも冷やかに、かくも寒く、溫かなるべき人情の中を、孤影相弔憑しつゝ、頬痛の、憂はしげなるよ。

小女を見るにつけて、まづ彼女の心は動きぬ。

これわれにとりては、解でかなはぬ謎なり。ときのふもけふも、同じく思ひの環を描けり。

「まことに、人生の旅路に『家』は價ある保護なり。玉座なり。權威なり。沙漠を横斷する駱駝にも似たらずや。或時は、家族の脊に相乘りて、茫々たる人生を旅す、或時は、家族の爲めに、荷を背て、自から樂しむ。進んでは、わが身を裂き、其の湛えたる玉露を掬べ。甘泉を汲め!! と互ひに相勞は

り、相愛し、われ時に他の心となり、他、またわれと心を一にして、一の爲さるゝは、二之を爲し、甲の足らざる、乙之を助く、美しき嘉はしき、愛らしき人情の王宮!」。小枝子は、紙を展べて、筆を染めぬ。

世にも哀れなる人の身哉。彼の夫なる人と、子持てる妻との間に、何事か蟠りありて、幸なるべき宴、團欒すら、心に任せぬにや。

われも、物心つきし頃より、父なる人を慕ひそめしも、竟に望み得ず過ぎぬ。母の臨終に、位尊とき父上のわれに親しく手を執り、語を交し給ひしも、幵はわれにとりては一の愛情を動かすに足らざるなりき。家庭は、われにとりて、寂しき秋風原頭の墳墓なりけり。知らず、彼の人もわれに似たる身に非ずや。

「あの孃ちやん。」と小枝子は呼べり。庭に『みそ萩』咲きて、流の岩かげに、少稚きが酸漿吹けるに、其面輪、紅に、優しき眼差にて、名を呼ばれたる方

にふりかへりつ。

「何をしてらッしやるの。まア、お美しい繪でございますことね。」

小女は、膝の上に、西洋雜誌の口繪らしさを披げ居たるなりき。

「お獨で……お母さんは？」

「母さんは病氣いの。頭痛がするつて……」

「さう。お惡いことね。貴女お幾歳にお成り遊ばします。」

「八歳！」

と締りある口元、罪なう笑みて、つと手を差伸べ、花の房一つ、早くも馴染て

「御覽！小母さん。いゝでせう。簪にして……」

「貴女のお頭に、妾、挿て上げませう。ね。そして、貴女、小母ちやんが、種々なお話をして上げませうし、また、面白い畫もありますから、遊びに入

ッしやいまじな。ね。可いでせう。」

小枝子は、さし覗きぬ。

「お母さんにさう伺つて、可いと仰有つたら……ナニ、左樣仰有るわね。今晩是非ね。妾、お迎ひに上りますよ。」

小枝子は、この罪なき少女の玉のごとき、白き顏を見つめつゝ、融るやうなる眼をもて、その横面を見入りぬ。

小女は、膨よかなる頬を含みて、輕く、酸漿を鳴らしぬ。

日は薄く弱く、而かも美しく光りて、庭の木立に、少しく風あり。

「露。露。」

低く呼びぬ。誰れを求むるにやあらん。答はあらで、椽に掛たる駒鳥は、高く囀れり。

折柄、通りかゝりし宿の婢の、閾際に手を支へ、

「お呼びなさいましてございますか。」
「ア、露子は居ないですかね。先刻まで、こゝで遊んで居たのだが…」
「嬢様でございますか。」と婢は、首肯つゝ
「お庭で三番のお客様とお遊びでございます、呼んで參りませうか。」
佗しげなる面色かな。その美しき顏にも、血の氣全く失せ、眸重げなる婦人の、胸に手を置きて、しばらくは、何事をか呻吟すらん。やがて、
「どうかね。怪我でもすると危ないから……」
婢は、婦人の餘りに子を思ふの過たる。決して常識を逸たるにやあらんなど思たり。
「ぢやア一寸お待ち下さいまし、直に妾が呼んで參りますから……」
と立上りぬ。
「どうかね。」婦人は眸を閉ぢて「本當に危ない。庭などへ出て……」と獨語

ちつ庭に遊ぶことの何の危險をや感ずらん。少女露子は、夕空のかげに、自然石の上に踞し、美しき小枝子と、何をか睦じく語れるに非ずや。
「あのお嬢様、夫人様がお召でございますよ。」
「母ちやんが呼んでらして？」
「さア、御一緒に參りませう。」小枝子の方に輕く會釋して「ぢやアお嬢様をお借り申して參りますよ。」
「小母ちやん今晩小母ちやんところへ遊びに行つても可いこと？」
「可うございますとも。待つて居りますから入らッしやいね。屹度ですよ。」
「妾、お母さんにお願ひしますわ、繪だの本だの見せて頂戴なね。」
「種々お話をして上げますから。」
少女は丁寧に小枝子に別を告げ、婢に伴はれて、彼方の木蔭、温泉の窟の邊に、その彩袖を隱しぬ。

小枝子は新に得たる知人の後姿を見送りて暫時はわれを忘れたり。否、彼女は、頻りに、強ゐても、忘れんと欲する也。さあれなほ掃はんとして得ざるものあり、又しても空想は、彼女を擁して、海濱の夜に遊ばしめ、若き小原の語を響かしめぬ。

（九）

露子は跪きて、母の枕邊にあり。日は暮んとして日影なほ紙障の間にたゆたひぬ。

「母さん。」

沈默は、露子の母の心を封じ、たとへば、密雲の漠々として、晴れやらぬこの頃の空に似たり。

「露子や、露子や、お前、妾のいふことを聞くんだよ。危いこと。無暗と、

庭などへ出ると、犬が來ませう。露ちやんがうつかりして居ると、犬が噛むのよ、水が出て、露ちやんを流して、海へ引張つて行つちやア貴女どうする氣なの、オ、怖い、恐ないことよ。」

「母ちやん、犬も何も居やしないことよ。可笑しいわ。お母さん。」

露子は、母の言ひ出づる言葉のいかにも興ありげなるに、さりとは、何をしかく案じ出でつらむ、と思ひ煩ひぬ。さあれ、露子は、かゝる際にも、母が曾つて起りし恐ろしき神經の苦悶を察し出でゝ靜かに、

「母ちやん、又何處か惡かアないの、犬も何も庭に居やしないことよ。これ、こんな奇麗な花……花を御覽なさい。佳い花でせう。母ちやん上げませうか。」

病夫人は、じつと瞳を、愛兒のさし出す花の上に注ぎ居たりしが、

「まア。その花！これ、露。お前その花、父ちやんから貰つたのぢやないの、嘘つき！父ちやんの嘘つき！そんな花などくれて、それで妾を欺さうと思つ

たつてそりア駄目だ。」

「父ちやんは居ないのよ。母ちやん。東京へ出てらつしたのだわ。父ちやんがそれを持て來てくださるものですか。これね。隣の小母ちやんに貰つたのですよ。」

「さう。奇麗な花だねえ—」

そのいふところ捉ふところなし。母は狂せるにあらずや。

露子の眼は疑惧と、苦悶とを以て滿ちたり。

「露子、お前、其樣に我意を張るものぢやないよ。危ないと云つたら、そりア何時、どんな事があるか知れないンだからね、用心しないと不可よ。妾は、露ちやんが、怪我でもしやう者なら、生きて居る氣はしアしない。でなくつても、皆なが露ちやんを苛めて、苛めて、苛殺さうと羅つて居るンだからね。」

母なる人は、眼を吊り上げ、一面に無限の憂鬱懊惱の樣を表はしつゝ、

「だからね、母ちやんの傍を暫時だつて、離れるぢやありませんよ。可かい妾の手をさへ確乎握つてれば、決して恐ろしい者は露ちやんの傍へ來ないのだから。」

「母上。妾、其樣なに恐かアないことよ。母上は、種々なことを案じてらつしやるンだわ。何故、其花見て、其樣に厭なの。妾、隣の小母ちやんに上げたら（あゝ奇麗な花）だつて其樣仰有つてよ。母ちやんは、其花嫌ひ？」小女は愛らしき瞳を見張て、靜かに母なる人の方を眺め入りぬ。

「花？妾、見たかアないよ。こんなに氣のくさ〳〵して居る時に、其花を見るとね。あゝ露ちやん。

虻を逐ふてね。妾は、花を挿で居た時、恐い〳〵顏をして、お祖母さんが入らしたの、其時の顏つたら、今思ひ出しても、ぞつとする位よ。

其樣なこと、何も知らない、罪のない露ちやんが聞くんぢやない。ホ、、。

満らないことなのよ。

だけれど、露ちやんが花を妾に見せると、其恐い祖母さんの顔や、其時のことが思ひ出されて、妾悲しくなるから、どうかね、其花をかくしておくれ。後生だから……」

少女は輕くうなづきつ。

「だつて花が可哀相ですわ。母ちやんに褒めて戴かないで捨てられちやア。母ちやん。まアよく奇麗に咲いたね。と云つて、やつて下さい。」

と少女は、黄花一輪、手に翳して、ふり廻せば、火のやうに、その光は四射し、つる〳〵と手を離れたりと思し。

「きやつ！」と一聲夫人は魂消る聲を上げ、袖を蔽ひて、顫ひに慄ひぬ。

その聲のけたゝましさに、家の婢は驚ろきて、慌たゞしく室に入れば、紅花の空しく潰れ崩れたるごとく、婦人の打倒れたるを幼なき少女がひしと抱

ひ寄りて、泣き悲しむ狀の、事の急なるあるに、

「夫人樣、何爲さいましたか？。嬢樣おつ母さんが何うなすつたのでございます。」

「母ちやんが……妾、悲しくて……」とばかり、少女は、婢の顔を仰ぐや、涙は雨の如く下るなりき。

この騒ぎに、小枝子は、今しも横濱なる師友綾子の許に認めんとせる文を中途に投げすてつ。駈けつけたるに、それに力を得たる少女と、婢とは、はじめて愁顔を開くなりき。

「露や、露子や。」と冷たる唇の動きそめたるに、一同は、その方に凝視の眼を峙だてたり。

「よくお氣が付きましたねえ、それで、どんなにか安心いたしましたらう、夫人樣、御氣分はお惡くはございませんか？。」

「貴女は何方様でございましたかね。」
「妾と致した事が名前も申上げませずに、失禮いたしました。妾はお隣室に居りまする溝畑小枝と申すものでございます。どうかこれを御縁に。」
「妾、どういたしませう。こんな取亂したところをお目にかけて……貴女どうか御免下さいまし。」
「イヤ、妾こそ、突然御居間などへ入つて參りまして……實は、お嬢樣にいろ〳〵お話をいたしまして、お嬢樣とは、お友達でございますの。ね、お嬢樣！」
「あ、小母さん。今夜小母さんところへ行つても可いのね。」
少女は無邪氣なり。かゝる際にもかゝる言をいへり。
「入らつしやいまし、きつとね、姉さんの許へ入らつして種々お話をいたしませうね。」

垂髪を撫でんばかりに、小枝子は、露子を劬りつゝ
「こんな可愛いお孃さんをお持ちの夫人樣はどんなにお樂しみでございませうね。
妾共は、最う子供が第一の友達でございます。無邪氣なと申してこれほど可愛いものは他にございますまい。お子供をお持ちの方は、どんなにお幸福かも知れませんわ。家庭に子供のないほど寂寞な陰氣なものはございますまい。誰方でも仰有ることでございますが。子供のない家庭は、閾を跨ぐと直に知れる相でございます、家庭を持たない者は、直にまた判ります相で、さういたしますと子供は天國でございますわね。」
「まア貴女の仰有るやうに、妾も最初は存じて居りましたの、去かしそれも唯一時の空想でございました、失禮ながら、貴女は坊ちやんかお孃さんか……お可愛いのがお在りなさいますでせうね。」

平靜なること水のごとく、夫人は小枝子を見つめたり。

「妾……ホ、、。夫人樣。」と小枝子はさと顏を赤うせり、

「ぢやア、貴女はお子さんが入らッしやらないのでございますか。」

「獨身でございますもの……ホ、、。」

「まア、お獨りで？」と夫人はかくも美しき婦人を世間のいかなれば、寂びしき孤獨生活を營まして顧みざることのあるべき。今やわが國に於ける男子は洪水のごとく少しの欠縛をも免すべくもあらず、滔々としてその慾望を滅らしつゝ、甚しきは、夫あるの婦人をも、犯さでは已まざらんとする狼藉なる態度を耻とせざる亂離不倫なる世に、果して、この人のよく自から孤持して移らず、犯されず、穢されずとせば、何ものかそれに打ち克つの力量あるべき境遇事情あるか、さなくば、われと感を同うしてみだりに男子の侵擊力に降服ざるにや、さらば益〻敬すべし、と自づからの心に忖度りて、夫人は、

しばしは次べき語を發し得ざりき。

「貴女の樣なお美しい身をどうしてお獨身で置く世の中でございませんわ。貴女、貴女は何と思召ますか、婦人といふものは、まことに損なものでございますわねえ。これ程、不條理はございませうか。ね貴女！」

なほ深き彼女の秘密を語るべき言辭を次んと欲するなりき。

はじめて會ひたる人の口より、はじめて深き身の上噺を聞かされたる小枝子は驚きぬ、いかなる答もて之に對すべき。

われには、秘め、秘むべき多くの秘密を有する身ぞ。わが父は華族にして、藝妓に昵親み、わが母を捨てゝ、われを孤兒の境に投じたり。

その幼きよりわれ等は、心を傷けられ、愛情に弄ばれ、また多く苦痛と哀感とに苦しめられたり。わが母はわが爲めに、手を執つて、臨終の牀に、ゆめ男子の肌に觸るゝ莫らんことを警しめ、更らに、わが行末に、女子が情

愛に關して、われのごとく悲慘の境遇を作ることなからんをいへり。

今やわが年更て、はじめて、母の警戒のいと切に、緊く激しくわが情を挑み來るに逢ひてより、いかに、母の戒律の深き意味あるを感じぬ。

現に、わが前に横はれる一婦人の、その姿痩せ、その色衰へ、この愛らしき兒を抱いて、而かも憂え、窶れ、悲しめる狀を見るに及んでは、熬れる焔に、一斛の水を注ぎかけられたるごとく、その炬は弗と消へて、加るに、戰慄は彼を襲へり。

「まア夫人樣の御冗談ばかり、妾、其樣な事を……こんな尼の樣なものを、誰が相手にいたすものでございますものか。全く、かうして、寂しく世を朽ち果てるのが望でございますもの。それにしても、かういふ優しい可愛いお兒さんを見ますと、全くこれでも枯木でない證據は、子煩惱の性僻がむらむらと起りますもの、可笑しなことでございます。夫人樣の身にお成り遊ばしたら、どんなにお可愛いことでございませう。」

夫人は、眉を顰め、

「他所から御覽になれば、左樣かも知ませんが、妾共こそ何の爲めに世の中に生れて來たものか。とそれが解らない位ですわ。かうして、苦勞するほど馬鹿な事はないのでございます。貴方のお身の上が妾には、また羨ましくて堪りませんの。」

襟を合はして膝を進めぬ。

(十)

小枝子は露子とは、かくて親しき友となり、露子の母柾子、亦隔てぬ友垣を結びぬ。

相接すること日に繁うして、小枝子は、柾子の心狀の常に苦悶の爲めに、

其平を持する能はざるを感じぬ。いかなれば、婦人はかくも結婚によりて、其天眞を傷けられ、其平和を破られ其愛情を蹂躙さるゝことぞや、わが母も然り。この人も然り。われは、世に、美しく飾られたる盛衣の花嫁を見るごとに、中心の傷を感ぜざるを得ざるよ。羊よりも弱く靜かなる人の世の、何ぞかく物のこれを擾さずば止まず、汚さでは叶はぬにや。柾子の悲痛は、良人の上にあり。朧氣なりし謎の、やうやく舞ゆくにつれて、小枝子は、柾子の指頭の指輪、簪の玉、さては、燦として輝やく胸の釦まで、皆一々、この人を欺きて、死地に陷れ、情なき良人の、なけがしに待遇を嘲けるがごとくに見ゆる也。

哀なる人は多し、乞食の今日の衣食をも支へ得で、薄き衣の外に寒凍あり弱き胃腑の底に饑渴あり。かゝる憂多き境にある人の上にのみ之を見ず、或は老て、求むるに職なく、浪々として、漂よふ木の葉の、いづくに歸宿する

を知らざる人あり。或は、世をすねて、痩骨心と共に淋れたる人もあるよ。かゝるもの、いづれか悲しき、哀なる人の行世の影に非ざる。

されど、更らに〳〵、この世盛りの美くしき人の、艶あるをもなほ石のごとく、脂膩あるをもなほ朽木のごとく、花を自づから萎ませし、心を自づから痩しめて、なほ、枳殼を抱いて、花さかんとする朝鮮牽牛花の如き、その强からぬところに深き情の籠りて、そを見る度に、わが亡き母の上をも思ひ合はせ、今や、滿潮に似たる小枝子の戀心は、一時に褪せ、醒め、そを滿衫の塵と、穢なく慄ひ落さでは已まざらんとの意の胸に漲るものある也。

夫人は、縷々として、愛なき人を縋りて、なほ、そこに愛の溫光に接せんと藻掻くなる身の上を自から、憐れむべしと感じながら、そを打捨て、この心の底より新らしきを掴まんとし、美くしきを見んと欲するに似たり、不產の石を抱いて、その孵らんことを待なる恐かなる鷲のそれに。小枝子の聰き

眼は、一面にかく冷やかに觀察するなりけり。

「どうか致してと存じましてね、自分共の不束から、良人の機嫌を取ることの出來ないのは、全く婦の罪だとは存じますが……それも子供のない中なら何でございますが、露が可哀想だと思つて、どうか少しは、宅氣に成つて下さいまし、と妾は幾度も申しましたのでございますが、男といふものは、あの申せば斯うと、逆に成られて、自分でも餘り面白くも御坐いますまいに、軌る車の止め度を失なつた形でございませう。ね、溝畑さん、斯んなことを申上げると、愚痴な奴だとお笑ひ下さるでせうが、かうして、お心易く願つて居りますのを可い事にして、勝手ばかりね。」

夫人は又しても聲を曇らすなりき。

「御最でございますとも。妾達のやうに、獨法師の極樂蜻蛉、書生風の生活の外に、世間を覗つた事のないものでも、夫人樣のお心持は何うだらう、と

お察し申して居ります。併し、かうして、嬢ちやんが、日に日に成人遊ばして、其を御覽なさるにつけて、御主人樣のお心持も段々直つて參りませう。かういふことは、他人の兎や角と申上げるものではございませんが、不圖した動機から、見違へる樣に内思ひにお成り遊ばすものでございますよ。」

「さうでせうか。貴女の仰有る樣だと宜ですけれど、それ、宴會の、それ、交際のと、男子の周圍には、酒と女！かういふ風に、危險なるものがまいまいいたして居りますのですから、餘程堅固な意志を有て居ないと飛んでもないことに、成つて了ひますわ。」

夫人が、悲痛なる口調にて、攻擊の面矢を注ぎかけたるは、男子の交際社會と、婦人の内面生活との、餘りにかけ離れたる狀なりけり。

「さうでございますとも、妾共も、平生、左樣いふ考を持て居ります。男子が今日まで社會の表面に立つて居るものですから、それに對して、得ると

ころも、又求めるところも、妾共では、過當と思はれる程、慰樂を探して居るのでございますね、だから、良人が得意の境に立つて、世間に巾の利く方の家庭に限つて、夫人の心づかいは、一層でございます。今日のやうに、婦人が、家にばかり閉籠つて、良人の事業にも精神にも、何等の干渉、疏通を得ないのは、どう致しましても、世の中が未だ開けないからでございませうね。」

圖らずも、小枝子は、われを忘れて、氣焔を昂めつ。

良人の愛を求めんとして、やゝもすれば、迷徨れんとする可憐なる婦人と、戀を絶對に罪惡として、萌え出でんとする青春の血の動きを抑へつゝある處女とが、迭みに、その怨みある心と、嘲けるが如き觀察とをもつて、戀其者の外に眞相を解せざる戀愛の腹中に入りて、社會とわれとの立つところを評せんと試みつゝあり。

正當なる家庭の解釋は、かゝる際の、偏視の眼をもて觀べきに非ず、要するに『夕顔棚の下涼み』を以て、家庭の理想とせる淡泊に求めざるべからざる也。何すれぞ、その忖るところのわれを主とし、事件に上りて問題の解決を急にする。

夫人は、胸挾らるゝ如き溜息を吐き、

「實際ですよ、今少し男子が、婦人に對して尊敬を拂ふ樣にならなければ、家庭の平和など到底望まれやしませんわねえ。」

「婦人に取ましては、良人の社會上の地位や、自分の榮耀などは、第二で、どんな辛い生活をいたしましても、一家睦じく暮すのが何によりでございます。」

「全く、奴隷のやうなもので、哀なものでございますものね。少しは、家庭の慰樂でもなきア、生きて居られませんわ。」

膝に凭て、すや〳〵と眠りし露子は、俄かに物驚ろきしたらん風にて、

「おッ母さん〳〵。妾。」

「露ちやん、何うかしたの。夢でも御覽なの。お母様はこゝに居るよ。可笑な子だねえ。」

夫人は、小さき愛兒の手を確乎と握れば、すや〳〵と、又、何時とはなしに、夢路安らかに、彼女は、母の手を固く取て寐息安げなり。

「これでございます。何だか怖い夢にでも襲はれたのでございませうね。何といふ無心なものでございませう。妾が手を持添てやれば、安心して、斯樣に、あら、露、厭だわ。生意氣でございんすわねー」

小枝子は、少女の寐顏と、伏目勝なる其母なる夫人の樣子を瞻戍れり。

（十一）

凪ぎたる空や、伊東霽れて、珍らしき日の入なるよ、濱は靜かに浪は、久しき激闘の殘痕を收めて、しばらくは、その岩と戰ひ、空と搏ちたるその骨骨しき水の休憩に入れり。その干潮の潟を餌を漁らんとにや、翼綏う海鳥の飛びては又さまよひつ。この時、彼方の濱より、二個の影あらはれぬ。一人は疑ふ方なく、わが露子が母、一人は其良人なる人なりけり。

彼等が、人生に於て、二個の形影を相投ずるや、かくして海濱に貝を拾はんとも志ざせしなるべし。はたまた打とけたる世がたりに、悲しきを慰められ、淋しきを賑かさしめんとせしなるべし、しかも、この靜蕭なる海光の中夫人の面に一點の憂を含めるは何の爲ぞや。

夫人は始終、俯向の態度をとりぬ、男は、肥え、膩脂ぎりて、酒の滋味に、肉と皮との營養の樂なるに比べて、その、等しく喜憂すといふ夫人の色蒼ざめ肉落ち、心に深き痍の傷みに堪ざらん樣なるは何の故ぞや。

「あれ丈け云へば、大體解り相なものだね。俺だつて、例の件には、隨分、後悔しとるよ。それさえあればこそ、福原正種が、何遍、頭を下げて妻に謝つたと思ふ。

過去の罪惡は、鉞で一打ち、木は成長に從つて其幹を太することがあつても、鉞の痕は、依然として、その樹木の生存して居る限りは存して居るのみならず、幹が大きくなる程段々その痕が目立つて來るのだ。柾子、俺はかうして、さつきから、事を分けて、お前に云つたことを、お前は、何とも返事をしてくれないのは、少し酷だよ。全く酷いよ！」

男は、威すがごとく、謝するがごとく、また心より自づから咎むるがごとく、頻りに、夫人を說伏せんとする。その眼の賤しく働けるよ。彼は、夫人の瞳の微動なるも、その底に何等かの意味を發見せんと欲するに似たり。

夫人は、極めて冷やかに、

「貴方は、先刻から、返事をせいと仰有いますが、そりア貴方の御無理と申すものでございますわ。」

「貴方が御考へ遊ばして、自身でお咎め遊ばしましたら、それで可いではございませんか、妾は、それを何ぞ申す權利がございませんから、貴方の爲さる通りに服從して參るつもりでございますもの。」

「あハ、、、。だから、私はお前が氣儘だといふのだ。男子がかうして、妻に對して、前非の後悔を白狀して、懺悔してだね。どうか腹を立てず又私の前の不行跡を許してくれ。と云つたら、大抵のものなら、それを喜んでくれなければならぬ筈だ。それをお前は、そんな不興氣な風をして、勝手に成さいまし。といつた風なのはちと酷い。かういふ時には、少しは、平生の我執とか行掛りとか、又は、不平とかを一洗して、改めて吾等の精神に同情して、洒然としてくれんぢや困るよ。」

正種は、唇熱し、息迫りて、なほ、堅く妻の手を握り、打ふりて、其決答を促さんとする也。夫人は冷笑して、

「云かし妾には、どう致しても、貴方の仰有る通な氣に、成れませんものね。貴方の仰有るのは、命令でせう。かう云へと御命令なら、妾はそれに背く權利がございませんから……」

「能く權利々々といふね。夫婦の間に權利の義務のと、其樣馬鹿な杓子定規や、理屈は用ゐるものぢやないよ。私は、さういふ人だとは思はなかつた。柾子、お前は、この頃非常に僻んどるぞ。」

「左樣でございますかね。」

柾子夫人のいふところは、全く良人の求むるところの意志を違ざかれり。

「ぢやア何と申し上げたら、貴方は滿足して下さるンです。婦人は、義務ばかり拂つて居つて、男は、如何なことを爲さらうとも、改悔た！と一語さへ

仰有れば、それで濟むのでございませうか。」

「理屈を廢せ……理屈でいふのぢやない私は、最初から情を以つて、お前に話をして居るぞ。それにお前は一々、逆に〳〵と私のいふことを取つて、私を苛めるから困る。」

正種は憤激せる情を、極めて平靜なる語調もて語ちんとせること明らかに夫人には讀まれき。

「苛めるの何のつて、貴方、其樣なことを仰有つちやア困りますよ。妾はまでございますよ。妻が良人を苛める……ホ、、、貴方は、少し御自身を反省なさるが宜しうございます」

夫人は、面をそむけぬ。足許に潮あり、パサリと崩けて、やがて又チョロチョロと爬て退ぬ。

二人語らず沙に浸む潮の音靜かなり。

「貴方は最初御決心なすつた通りに遊ばせば可ぢやございませんか。何も妾に御相談なさらなくつて可い筈です。」

夫人は飽きまでも、儼乎たる其態度より離れんとは欲せざるなりき。

「まだ其樣いふことを言ふ、お前はあまり執念過るよ。一體、人間といふものは、さう一圖に自分の思ふ通りに行くものぢやない、妻君は、常に宅ばかりに居つて、交際社會へ出ないで、男子の社會狀態を解しないから、其樣いふ風に腹も立つのだが、婦人と違つて、よし他の婦人に拘つらつたつて別に之ぞといふ深い意思があつてやるのではない、まア一言にいへば、酔興さ、酔興でしたことは、餘り咎めないが可い。」彼は新らしく辯解の辭を發見した る心地にて頻りに「酔興！々々。男の戯さ。戯れにやることを、左樣一々咎め立てせられちやア、一體男子の活動といふものがなくなる譯だよ。」とな は辯ぜんとするなり。

夫人は、最後の止めを挿す如き口調にて

「其れは、貴方方、男子の御勝手な議論でございますわ。妾は、決して、貴方の爲さることに、今日まで、我意を張つてお止め申したことも差出たことも申した譯ではございません。今日の事だつて、貴方が御自分で種々と御辯解なさるのでせう。どうか其事は仰有つて下さいますな、貴方、露が目を覺して居ると何でございますから、早く歸りませう。」

「ぢやア私の云つたことが解つたのだね、何も私は自づから辯解して居るのが何のといふ譯ぢやないけれど、お前が例にない恐ろしい權幕で議論を吐きかけるには驚ろいたよ。更めて云ふが、私は今日までの行爲を自分ながら、非常に愧ぢて居るし、今から斷然改悟せうと思ふのだから、お前もあまり氣にしないで、快よく暮して貰いたいね。お互ひに夫婦間に種々な蟠りがある間は一向面白くないものだが、かうして、打明けて了へば、お前の方でも

すつぱりしてくれんでは困る、全く、今まで、滿らん遊なんかして、お前の良心を疵けたのが、僕は染々惡いと思ふよ。ナ、可いかね。」

と彼は狎々しく夫人の肩を打たんとする夫人はつと身を交しつゝ、

「貴方、可い加減になさいまし。妾は、そんな眞似をなさるのは好みません。」

峭立昂然！正種は顏の色を變たり。

夫人が放ちたる最後の勁矢には、流石の正種も胸の扉を射ぬかれたり、彼はいかにもして、夫人を慰め得んと焦るに拘らず、夫人の心は頑固にも毫も良人の解んとし、弛めんとするに從ふべくもあらぬに、正種は苦悶の樣を隱し得ざるなり。

夫人は靜かに、勝ほこりたる猛將の、敵の頸首を緊と押へながら、靜かに引導を渡す時のそれにも似て、一言一句、最と痛切に、

「貴方が家庭を顧みもして下さらんで、いろ〳〵と外でお樂しみ遊ばす理由

はそれでございますか、家の者は、活動々々と外面の交際が酒と女でなければ出來ない方と貴方を思つて居りませんでした。貴方は最初の約束をお忘れ遊ばしていつしか愛情を二三になすつたぢやございませんか。妾は今に貴方がこの精神から醒て下さるか。と思つて待つて居りましたが、泣いてお願ひ申したこともお察しなく、貴方は男子の特權だ、外のことは婦人の知つたことではない。と仰有つたぢやございませんか。今、妾の精神がすッかり貴方の爲めに氷のやうに冷却して了つてから、また素の通りに愛情を要求なさるのは、少し得手勝手でございます。妾は今冷てかうして冷靜に成つて居る妾の精神を、再び燃して、貴方の冷酷な爲され方に苛なまれることを欲しないのでございますから……」

「こりア驚いた。お前はまだ理屈をいふ積りか。さう手酷どく出んでも、可いぢやないか。男子がかうして……全く手を合はさんばかりにして謝まつて

居るのだ。ちつとは何とか考へてくれたつて可いぢやないか？」

「妾に貴方が手を合はして何と仰有るンでございます。不見識ぢやございませんか。貴方が御遊びに成るのも、外妾をお置き遊ばすにも、皆、立派な理由がおあり遊ばして、男子が社會の事業に苦勞する上は、少しの女道樂や酒位はどうかしても可い。といふことをいつも歌のやうに仰有るのぢやございませんか。良心にも恥ぢはせん、男は生理的に一人の婦人では、社會と健闘して行く苦痛を慰むるに足らん。と仰有つた……現にさつきも左樣仰有つたぢやございませんか。妾は妾で守るべき道を守つてをります。良人が良人の道を棄てたからつて妻が妻の道を捨てることは出來ませんものね。」

彼女は昂然として下るべくもあらず、平生、優柔して、言はんとするところある も之を抑へ、爲さんとするところある も之を止めたるつゝましやかなる彼女が、鬱積せし不平は良人の降服と共に、一大火焔を成し、炎々として

天上せんと欲するなりき。

（十二）

小枝子はかくて夫人の心中にかくのごとき蟠まれる多くの事情あるを知りてより、偏へに同情を傾けつくさんことを欲しぬ。

家庭にあつて唯一の慰樂は、良人の愛、小兒の愛、家族の愛なるものを、何等の求むるところなくして、唯、愛情にのみ生息する婦人にありては、すべての金銀寶石は毫も意とするに足らず、それ花の如く顏の美しく輝かんことを欲するも、はたまた、指頭一些の爪の垢づきたるにも、少なからぬ關心の種となるも、畢竟するに、この愛の家庭を得んが爲ならずや、もし、結婚して、純ら良人の愛情を享受すること能はずば、夫人としては、死を與へらるゝの寧ろ心易きを覺ゆべし。而かも、世の多くの婦人が、この慘ましき愛

を二三にせる良人に嫁けるを見るごとに、小枝子は、その人のあまりに柔順なる……習慣の勢力に壓迫せられたる生氣地なき哀れなる境遇に同情せざるを得ざるなりき。それよりも、彼女の目には、愛なき良人にかしづきて、なほ忠實に箕箒の勞を執るは婦人が自づから其立つところ取るところ、爲すところを離れて、熱あらざる火桶を抱いて熱しといひ、冷たる水甕を抱きて冷かならずといふも同じく、僞善の行爲をして、人の本能に背きたる卑怯の徒なりと罵らざるを得ざるなりき。

多くの婦人の家庭にある有樣を見るに、彼等は良人より木屑鐵片の如くに見做され、箒、塵取としてなほ且つ甘んぜる傾なきにあらず、去かく、女性は蹂躙せられながら、なほ且つ男子に隷屬せねばならずとすれば、この女子の結婚は自家の安立を得んが爲めに、配偶を强請し、戀？愛？と、人情を率さ易き道具を使用して、男子の保護を仰がんとする一種の商業のみ。とかく

まで强烈に、女性に對しては、ほとんど極端なるわが小枝子の心の中には、かりにも一點の理を離れて身を處するの道に投ずるの考慮を有せざりし也。

はじめに、わが母に其慘ましき戀愛の最後を見、次にこの夫婦が悲痛なる內面の苦悶を聽きたる小枝子は、心ひそかに震慴しつ。

あゝわれは再び戀すべからんことをのみ思ふに至れり。

小枝子は、小原の事を忘れんとせり、若き大學生小原と逢ひて、淋しき伊豆の一角によき語り友達を得たる心地にてその親しみ自づから怪しむまでに深くなり行かんとする刹那、彼女は端なくもこゝにわれを戒しむるがごとく、正種夫婦が、互ひに閲ぎ合ふ戀の苦鬪のさまを見るに及んで、さなきだに戀愛の悲痛を感じつゝある彼女の身慄するまでに恐れを抱きて、今は中々に、かの可憐なる少女露子を見るにつけても、彼女が將來に見はれたる戀愛は——光明に非ずして、暗黑なるを認むるに至れり。

いかなればかく小枝子は若き身をもて思ひ煩ひすることぞ。彼女の苦悩は、生々勃芽する戀愛を、彼女は惡魔よりも恐ろしく感じて、これを振ひ落さんとするなりき。果して小枝子は、かくして、身を潔うし得べきものなるや。

伊東の滯在三ヶ月、初めこの地に來りしころは、若葉に杜鵑の頃なりしに、今は、潮の香戀しき夏の日盛りとなりつ。

天城山も青み渡り、はるかに見る伊豆の大島の烟も燃ゆる海の炎にも似て、かざす額に眉重きころとなりぬ。

この間に、彼女の肉の病は全く身を去りしが、更らに、彼女が求め得たる心の病は、いかにしても全癒すべくもあらざりき。

小原は、藤森生と、この一週ばかり箱根に遊びぬ。この間に、小枝子は、彼れを思ふ念を全く掃ひ去らんと欲せり。今し、夕やけの雲を望みて、伊豆燃ゆる勇ましき旗雲の勢に見入りしに、郵便脚夫のわが宿の門に入りしが、

間もなく小枝子の手に一封の書は渡されつ。

頭へる手先にて忙しく封披切りて、小枝子は、まづ瞳を定めてその文に見入りぬ。

伊豆の海光、漾よひ、搖めきその樺色したる力ある日の光肩越しに美しき人の横顔を照せり。

文には何を認めたりけむ。小枝子の面には醉へるがごとき美しき影の漂よへり。

『小枝子女史、箱根に來りてより、早や一週となりぬ。伊東の濱、磯の香高き月の夜や、君と里の小橋に立ち、多く語らずして多く思ひき、露置く野、朝嵐天城山の雲冠を吹亂して、靜かに小語が如く水車の邊りに薫る時、我れはヴァキオリンを彈じ君は美しき聲もてこれに和し給ひき。

懷ふ彼の朝夕いかに樂しかりしよ。月暗らうして梟啼きぬ。指を屈すれば

日七度び廻ぐりぬ。君が磯邊に聲をふるはして最後の決心を聞きさし時、我れを焦く炎々たる情火は萬斛の冷水を浴びたるが如くすべての希望を根こぎし、光明はすべて去り、たゞ一點胸中の痍を殘して、灰の如きされ、茫茫たる宇宙に彷徨する一幽鬼なるの感ありし也。

君に對して……君が高潔なる理想を聞きてなほ且つわれのかく女々しく君の信念を搖かさんとするがごときわれの弱きを怒したまへ。

かくまでにかの一時の交遊——感興の力がわれを傷めしめ、われを悲しましめ、われを寂寞の地に投ずるかを思へば、われはそゞろに伊東の朝夕に君を得たりし、深き歡喜の其大なる度を想起せずばあらず。

今日は、箱根山巓の風影に座して、そゞろにわれは、この寂しき胸の病を思ひ出で、悲しき中に、寂しき中に、はたまた苦しき中に、燃ゆる一味の情火を求め、手をふりかざして、其樂しき慰安に活きんとす。

伊東の一樓、海に臨んで、雲雨日に千變す、かくのごときは、今のわが心に譬ふべきかな。

かくして、われは、長久へに、君の面影を偲び出で、わが獨り行く人生の長途に、わづかに幽龕の燈火を覗ひ寄る心地して過ぐるに與なき酒甕抱く身ぞ、その人醉はすべき風味は、われを去り、堪えられたる胸、痛みは、醒後の傷を擁して、歡場の夢忍ぶに似たるべし、君よ、乞らくは、わが毛髮吹き亂す天風のかげ、その面影の來つてわが心扉に覗ひ寄りたまへ……』

文句はなほつきざるなり。小枝子は、再び見ざらん、聞かざらんと欲せし小原の言に、なほわれ知らず耳を傾けんとするなりき。

小枝子の見ざらんと欲する文ながら、いつしか手は其封皮を破りて、幾たびも之を誦んじぬ。しかく思ひ惱むの何の理たるを彼女自身怪しみながら、なほその文を破り裂くの勇氣なさなり、文の中には、小枝子の心を動かすべ

く、惹くべき多くの情意を含める文字充ちたり、しかく小枝子は、情に堪てる、而かも、燃ゆる如き文を見るに及んでは、前の夜の月の滾など思ひ浮べかの情篤き青年の切なる心を拒み捨つること弊履の如かりしを少しは氣の毒に思ふなりき。

小原も、かの夜のこと忘るべくもあらず高潔なる處女の情操の重んずべきことを知るや、自づから、青春の罪を深く恐怖しつゝ、小枝子を思はざらんとするなり。されど〳〵、小枝子が忘れんとして小原の事を忘れ得ざるごとく、小原も亦、小枝子を忘れ得ざる也。彼は、人なきを……否親しき友、藤森生を避けては、山に入り、風吹き來る雲湧巖頭に座して、靜かに、物思ふを樂しみとせり。

なにとて、かゝは、われの物煩ふことの繁きや。去れ、我惡魔！我心を弄ぶことかくの如きは、畢竟、われを弱しと見て、頻りに、わが情の缺陷を攻

め寄する情慾の奴が戯ならずや。

彼はかく思ひつ。何とかして、その塵を拂はんと欲する念の切なるものありしに拘らず、昨日も古き手帳の日記をくりかへして、バイオリン彈きし水車小屋の初の日を讀みたり。小枝子に逢ひし夜の回顧に耽たり。

その想像の矢は、伊東に飛びぬ。天城を正面して、小枝子は山に思ふの人となり、天城を側觀して、小原生は、海を思ひぬ。

かれの擧動のいたくも前日に異ること哉。

（十三）

藤森は、小原の爲めに、その煩悶より救はんと試み、始終相期して、其目的を達せずは已まじと思へるなり。

戀愛の鬼手にわが友を奪はるゝこと、敵の捕虜となすよりもなほ心苦しく

思へる彼のこゝ箱根の青嵐に友を誘ひ出して、願くば彼の小枝子を忘れんことを欲せしなり、小原は、われにもあらで、バイオリンを取て水車小屋にて彈ぜし曲をくりかへせり、一たびは忘れんと欲したる小枝子の姿、再び眼前に髣髴し來つて、今は中々に曲を調ぶるも堪ざらんとす。

青く澄みたる空に秋氣滿ちて、そゞろに心悲しまるゝを、小原は唯獨りかく物思ふの興味に打たれて茫然として、木かげに樂器を抱きて座せるを、藤森は發見しつ、そと其肩を打ちて、

「小原君、また考へ込んだね。僕は君が左程までに戀愛の魔力に魅られて居るとは思はなかつた、不可ね。其樣に種々思ひ惱やんぢやア駄目だ。」

「僕は考へてやせん。君に誓つた通ぢやないか。僕が小枝子を思ふことは彼女を墮落せしむる譯だ。僕は二人の間を高潔に、友人として十年の交誼を全うしたいとこそ望めだ。不潔な情交などをして、彼女の一生を誤らす抔とは

思ひも寄らんことだ。それは夙うから君にも話した積りだ。」

「然らば君は、その斷念した婦人のことを左程深く思ふ必要がない筈ぢや。一向其間の消息は僕のやうな野暮な人間には解ん。」と彼は小原の後の大樹に凭れて、

「一體君は未練だよ。其處まで執着しちやア物が拙くなる。何事も淡泊にやれ。淡泊に。どうだ。斷念出來たか。」

「知れた事よ。」

「然らばだ。君、一點念頭にも思ひ浮べない樣に男らしく斷念めるが可い。どうしても君がかの一婦人を忘れ得ないといふなら僕は、僕で決心がある。」

その語調は猛烈なり。

「決心？」と小原は色を變て、

「何如ひふ決心？」と再び問かへせり、

「あはゝゝ。貴公、その顔は何だ。もつと確乎しろ。」藤森は空嘯きつ、

「あゝ。わが小原も到頭駄目だなア。」

風あり一陣。森を動かせば、翠嵐一時に碎けて流れんとす。

「君はいつか伊東であの女のことを斷念すると云つたぢやないか。其舌の根の未だ乾かない間に又その事でお互ひに口を尖らして論ぜねばならぬとは、僕は本當に情なく思ふよ。小原、君は愈々吾黨の人物ぢやなくなつたね。」

「君はまた何故に其樣にあの溝畑を惡むのか？」

友の餘りに冷酷なるに、彼は、少しく激しもし、且つ少しく訴へ氣味の、泣かんとする聲を張つて言へり。

「イヤ、惡むのぢやない。全く惡むといふべくば、君の方を惡むよ。彼女を墮落せしむるのは君だ。あゝいふ人と君が戀愛の渦中に埋沒しちやア、それこそ、二人して、罪惡をつくる譯だ。彼の人にも母親の遺言があるし、また

君にも將來の大望がある身だらう。それが一時の痴情——さうだ、僕は痴情といふ——戀愛だとはいはん、……に迷つて、一生を誤るやうなことがあつた日にア君、どうする。二人共一時の不心得から、生きながら埋れ木さ、僕は其を悲しむのだよ。思つて居ない思つて居ないつと云ふ中にも、いつか知らず思ひ沈むのが戀愛の本性で、一度びこの魔力に魅られると中々蟬脫られんものだよ、次に驅落……次は心中かね。僕は其樣いふことを好かないと云つて君僕だつて木石ぢやないのだよ。」

と藤森は熱心に、燃えんとする眼にて小原を見つめたり。

「解つて居る。僕は君の忠告を兄の忠告だと思つて決して背きはせん、僕は斷念はして居る……がだね、全く君のいふ通りだ、思はずに居る積で矢張思つて居る。戀愛の魔手に擒にせられたといふ譯だね。僕は何故こんなに滿らない人間か知ら。」

と打悄れたるを見ては、藤森の氣焰もまた少しく下らざるを得ず、

「兎も角注意をしたまへ。僕等が斯樣ことを言ふと君は或は甚だ冷酷な奴だと思ふか知らんが、實際君の考は迷つて居るよ。」

と彼は冷やかにいへり。

朝嵐暮雨その心の薄の如く亂れ棄るゝも戀なればなるべし。琴の絃の音は、唯、無意味なる響をなすのみ、行雲かへる雲その去來、色もなし、味もなし、かくてわが小原は、初戀の、忘れんとしても忘れ得ざるを如何せん。

小枝子も亦然り。彼女は、この魔の如き一種の呪咀に遇ひて、日夜思ひ苦しみつ。既にかくも怪しく胸を痛むることの出來より、自づからを脫し盡さんには、如かずこの思ひ出多き伊東を去つて、再び清き神の事業にたづさはらんことよ。彼女はかくて、獨りその身を境より脫し得ば、すべての事、釋然として解決し得べしと信ぜり。

決然として、彼女は恩師須崎綾子の許に歸らんとせり。而かも見る、この山、この川、われにもあらで、雲閉ざす函嶺の邊に、溫泉の烟立つあたりに、バイオリン抱ける清秀の一青年、小原生のわが方を望みつゝある面影の、彼女の眸に印するなりき。

惆悵として門に倚りぬ。彼女は、患ふる身となれり、物思ふ人と成れるよ。

『獨身』の誡めに背かんことの彼女にはいと心苦しき限なり。さあれ、今一度びは、この心の搖動を抑え得べし、母が遺言の果して、二度び、三度び、罪の魔との鬪ぎを防ぐを得べきにや。

忽ち門外に人の往來忙しきを見たり、女中は色を變へて、

「あの三番さん、大變でございます。」

「何うしたの。」

窓より、往來を見下し居りし小枝子はふりかへりて、色蒼青めて土のごと

き女中を見たり。

「あのお隣の……。夫人が海に……。」

「海に……。まア。」

と小枝子の胸は早鐘の如く鳴りひゞきたり。楽しかるべき結婚、祝福されし彼の人の、良人は酒色に耽りて、妻の愛空しく葬られ、少女露子の可愛ゆき頬の笑ひ、母の死を止め得ずして、彼女は、痛ましの世に心狂ひて、冷たき海の懐に、その苦痛の軀を托し、騒ぐ胸の思を休めんとまでに思ひ迫りしにや。

あゝ呪咀、美しき形して來るこの魔の働き、人は、王宮のごとくして、憧れ寄る戀愛の殿中には、かくのごとき悲痛酸味の其中に籠れる事よ。母の暗示はこゝなり。一旦の情に走つて、深き〳〵わが母の誡めをおろそかにせば、そは大なる罪也。と小枝子は襟を正して、わが前に起れる惨ましき人の死を

悲しみぬ。

(十四)

運ばれて歸り來りし夫人を見れば、美しかりし鬢髪空しく流れて、青ざめだる面にかゝり、額白ろく、眼は閉ぢて、而かも、その頬のあたり、唇のはとりには、自づからなる笑さへ湛えられつ。

塵の世にありて、煩悩に苦しめられしかの人の、惨痛多かりしに似ずして、今はいかにも心平かに、平和に、すべて満足に迎へられし人として、一點憂愁暗恨を止めざるなりけり。

人は多く生涯を苦痛としながら、塵世の羈絆を斷得ず、その呻吟き、苦悶みさながら阪路ゆく痩馬の重き荷を負ゆくがごとくにして、涙と汗に塗れつつ夢のごとき空想の擒となりて、なほ且つ死を怖るゝこと深きその怯なるよ

り見れば、夫人が、今身を冷やかなる亂濤の肌に抱かれて、その骨を琅玕に
し、其肉を珊瑚とし、水晶の宮居に籠居する一徹清淨の人となり得たるを祝
したき心地せり。

檢死濟みし夫人の死骸は、今、白衣につゝまれて棺裏に臥せり。

小枝子は、四邊に人のあるをも忘れたらんやうに、その傍に進み寄り、

「夫人樣！」とばかり、はら〳〵と涙を垂しぬ。

露子は、小枝子の袂を緊乎と執り、

「小母ちやん、母上はね……」と聲を曇らして「妾、今日から、獨法師だア
ね。」

打仰ぐ面の雪より白く、清しき眼に、露の玉を浮べたり。

小枝子は小屈に、その愛らしき少女の頸のあたりを抱ひて、

「何……何故母樣はお歿れなすたんでせう。露子さん、貴女……これからこ

の小母さんと仲よく致しませうね。」

「妾、小母さんの子に成るの？」

「貴女母上と同じく便にして下すつて？」

「あゝ。」と少女は深く肯けり。

主人は座にあらで、空しく他人の騷ぐを、物賢げなる樓主の「電報打て」

「人を走らせ！」と聲を涸らして、采配せり。

小枝子は少女の餘りに深く悲しまんことを恐れて、わが室に拉れ行けり。

幼き時の思ひ出、俄かに彼女の心を領せり。わが母も……よし臨終の慰安
はありながらも、寂しくして墳墓に入りぬ。遺されたるわが生涯のいかに悲
しかりしよ。露子も亦われと同じく孤兒となれるかな。その母は伊豆の潮に
身を投じて、遺骸空しく少女の前に横はり、父は妻の死を知らで、今は何れ
にあることぞ。家庭の苦痛は直に心肉に迫る。これが慰安は精神的ならざる

べからず。富貴顯榮、この心の慰樂に何の値ぞ。神は、わがこのこの迷へる子に方りて、こゝにまた一個の例をもてしたまへり。慄ひ立て！わが心。小枝子は俯垂れて、少女は、訝かへりて其方を見つめ居たり。

小枝子の前に開かれたる慘劇の扉の中には、多く秘めなれたる人生の密事を私語がごとし。

この不幸なる家庭に生れたる少女露子の爲めに小枝子の悲痛は自己の上に生じ來れる事件の如くに感じ悼めり。

伊東の海今朝より浪荒らく、暗潮の聲は市にも漲れり。この時にありて、空座して小枝子は物思ひぬ。

かくして、われは幾多の悲劇によりて神の示し給ふ家庭人の末路……殊に一生苦樂他人に倚るてふ婦人、身の哀れなること、鞭れ地に倒れ伏す藜杖の如く、その死の狼藉として慌しきに慄然として、自づから選ぶべき眼前の風

光をもつとめて見ざらんと欲するなりき。

人はかゝる悲痛あるべき行途をも、つとめて見ず聞かず、驀然に盲進して、其折々の觸景を曰く運命曰く天意などと、泣き笑ひしつゝ、秘密を隱して、樂意を粧ひ、悍馬の奔馳するにも似て、自づから人間蠻性に鞭ちて、このあるべき苦悶をも飛び越ゆるに過ぎず、十中の七八人はすべて生活位に入るに及んで苦痛の手がせ首枷を加へらる。

われの迷へる哉。母はその死をもて、われに性慾に克ちて、平康を得せしめんとは欲したまへり。わが心なほも弱くして搖き一歩の誤りに、百里の差を生ぜんとす。この時にあたりて、夫人の死は、われを捉へんとする惡魔の手を振ひ落しぬ。安らかなる彼女の死！。この死を掴まんとしていくたびか煩悶せし。美しき笑顔して、夫人は天の樂園に入りたまひしといふも、その水晶透徹の平安地に、死を求め得るまでに幾多の遭遇ありしよ。

さるにても、われは、こゝに益々わが恩師なる須崎綾子の人格のいと高きを敬慕せずばあらず。小枝子は愛らしき少女露子と相對してかく思ひき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

鎌倉女學院の芝生は綠を加へぬ。庭園の木立は、こんもりとして梟の宿居に適ふべくなりぬ。伊東の逗留は小枝子にとりては多くの試練なりき。彼女は、何人も受くべき小女の煩悶に煩悶を重ね、意情の戰ひに痩せて、再び、女學院の庭に立ちたる時、はじめて甦生たるがごとく感じたれど、又何となく云ひ知れぬ胸の淋しさを覺ゆるなりき。

その寂しき念は、小枝子が、二十年來未だ一たびも經驗せざるものなりき。かきむしらるゝ如き胸中の苦痛！あゝこれ何の痕傷ぞや。

尊とき綾子先生は、妹友とも親しむ小枝子の、華々しき顏を女學院の校舍に見るを得たるを喜びつ。今宵は、小枝子の病の全快の感謝會を第一寮に開

きて、組の生徒と其準備をなせり。

小枝子はこの深き師友の同情を心より感謝せり。されども〳〵、つゝみ得ぬもの……靈の戰ぎ……神ぞ知ろしめす、われは、この既に一たび危ふくも墮落せんとせし軀を神の前に投げて、わが肉の病の單り癒たるのみを謝する

の厚顏ありや。

椰下より馳せ來りたるものあり、ひしと小枝子の袂をとり、

「先生、まア。御機嫌よろしう！」

伊豆山の蔭に共に人情を語りし夏子は其人なりき。

「先生何處かお惡くつて入らつしやいますか。」

「どうかして？」

「イエね、少しお顏色が……。」

小枝子はその弱き眼もて敎へ子を見たり。この時、講堂に、ベルの音聞え

て、祈禱室に灯を點じたり。

小枝子はひれふして祈らんと欲せり、

「神よ、試練に克たしめたまへ!!わが心に甲冑を粧はしめ、あらゆる情慾に打克ちて力ある信念の光を仰がせたまへ——」と。

少女の煩悶 終

明治三十九年十一月二十日印刷
明治三十九年十一月廿三日發行

少女の煩悶奥付
定價金六拾錢

著作者 齋藤邦花

發行者 平山勝熊
東京市京橋區尾張町一丁目一番地

印刷者 中野鉄太郎
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

發兌元 隆文館
東京市京橋區尾張町一丁目

不許複製

(帝國印刷株式會社印行)

慘しき世路に悶ゆるは讀め

草村北星君著・宮川春汀君畫

母の面影

總クロース製美裝
定價金八十五錢
小包料金十錢

抑もこれ何等の靈筆ぞ、何等の妙文ぞ、女主人公罪を抱けるも、その慘しき半生涯は木女をして卷を掩ふて哭せしめ、石人をして涙をとゞめざらしむ。世未だかくの如く同情ある筆を以て深刻に、精細に、巧妙に女性の心理的描寫を企てたるものあらず、況んや企てゝ而かも成功したるものをや。曾て大阪朝日連載中每朝稱讃の辭の雨の如く投ぜられたりといふもの宜べなる哉。明治年間の有數の傑作今や出づ。紳士、淑女、學生、父兄何人を問はず、必らず左右に一本をそなへざるべからず。

發兌元　東京東京橋尾張町　振替貯金八五三　合資會社　隆文館

草村北星君著　宮川春汀君畫

小說

相思怨

表紙總クロース金銀箔押
口繪精巧木版極艷麗

菊判全一冊
定價金七拾五錢
郵稅金八錢

不用意なる戀愛が齎す悲慘なる結果を如何にして避くべきか。戀愛に要する道義的努力の價値如何一時の狂熱に伴ふ永劫の苦痛を豫想し得ざるは斷じて思慮ある士女に非ず。著者は此見地に立ちて此篇を作せるが如し。醜惡なる寫實小說に飽きて醇雅清新なる愛情の福音を希求する青春の士女は試に一本を手にせよ更に家庭小說として適切なるは世評に聞け

草村北星君著　宮川春汀君畫

小說

露子夫人

總クロース表紙金銀刷込
體裁極めて優美

菊判全一冊
定價金七拾五錢
小包料金拾錢

露子は萬難を排して戀愛の希望を全ふし司馬夫人となれり、されど世間の想は美しき理想の夢にはあらざりき。幾多泣く可き悲痛事は身邊を圍繞して過き來し方の今更にかくは想しき辛かりしを父母の斯くは蔑はるゝ。戀の爲に自由を希ひし露子は、今は却つて自縄自縛の苦境に陷れるなり讀み來りて瞑想す人生無限の恨事慘や並に到つて極まる。希くば青春想に泣くの諸兄姉よ、露子の上に一滴同情の涙を灑ぎ給はん事を

發兌元　東京京橋尾張町　隆文館

新刊

小説 筆子

菊池幽芳君著　鏑木清方君畫

筆子は現代文壇の雄鎮、家庭小説作界の明星菊池幽芳君が心血を灑ぎたる一代の傑作なり、豐富なる構想を配するに靈妙濃艶の筆を以てし彼女が波瀾多き戀愛の徑路、曲折深甚なる人生の慘目愴情を描いて、實に深刻精致を極め、讀者をして恍惚として篇中の人たらしむること斯の如きは、君の前著中にも亦類を見ざるところ、此篇今や美裝を凝して世に出づ、明治文壇の大作と稱せらるゝもの或は皆其光を失はん。請ふ速に一本を購ふて其眞價を知り給はんことを

クロース表紙金銀色活押
口繪精巧木版數十度刷

初枝之卷全一冊
定價金九拾錢
郵稅金拾錢

東京 隆文館 發兌

小説 賣花娘

幽芳君著　清方君畫

賣花娘の一卷其名既に可憐なり、之れを描くに著者獨特の艶麗纖細の筆を以てす。讀み去り讀來れば花顏の娘子楚々として書上に躍るを覺ゆ。花や花召しませ花の糸櫻、都大路の朝風に聲おろ〳〵と呼び行く乙女子の上に一片の同情を寄せ給はゝ、其の花籠の一束を買ひ取り給へと云爾。

新式洋裝美本
菊判　全壹冊
定價金五拾錢郵稅八錢

小説 澄子

草村北星君著　宮川春汀君畫

澄子は玲瓏珠の如き眞婦にして、時太郎は煥發花の如き才子なり、之や彼や節操に力め、意氣に振ふしかも紛糾せる世間の情事は、或は猛は奸婦を繞り、或は巧みに遺般の暗鬪を起し來つて、耶を拉し來つて、劇は、憐れむべき主人公が爲めに嗚咽せしむるものあり

全一冊
定價六拾錢
郵稅六錢

クロース裝釘粹麗最美本

東京橋 隆文館 發兌

小説 浮沈

柳川春葉君著　鰭崎英朋君畫

總クロース裝釘粹麗
菜判最美本前後二冊
定價前編六拾錢後編七拾錢
郵稅各金八錢

風一陣林頭の梢を吹けば、千顆忽ちに起りて、天、月は暗く、水は叫ぶごとく輕騰たり。轉變一生の定めなき世のはかなさを、涙正に浮きつ沈みつ、何地に行かむとはする。兄は血ある苛兵也、妹は涙ある少女也。著者ぞ兄に妹に、熱血を搾り、涙を絞りて、妹の爲めに、兄の爲めに、けん固情の聲を揮ふ。

麗子夫人

小栗風葉君著　鏑木清方君畫

總クロース表紙
裝釘粹麗
口繪精巧木版

前後貳冊
定價各六拾錢
郵稅各八錢

「麗子夫人」は小栗風葉氏最近の傑作なり、

「麗子夫人」は絢爛にして凄艷なる著者獨特の才筆よりなる

「麗子夫人」は最清新にして最趣味ある家庭小説なり

「麗子夫人」は婦女子諸君の爲めに著者が滿腔の熱を吐けるものなり

「麗子夫人は」教訓と慰藉とを世の婦者に與ふるものなり

東京橋 隆文館 發兌

江見水蔭君著
宮川春汀君鏑木清方君畫

小說

海賊の子

意氣冲天の勢は之を破天荒の老將軍に見るべく、剛强壯快の鋭は之を獰猛なる快水夫に見るべし、もし夫れ窈窕たる麗姫、薄命の佳美人並せ來つて巧みに落葩流水の艶を添ふるに至つては、或は壯に或は優に奔放は天馬の空を騁るが如く、纒綿は芙蓉の雨に惱むが如く、宛然之を拔山蟠海の風浪を前にして、彩華艶麗の花圃を見るが如し

前後貳冊最美本
口繪精巧木版數十度刷
定價各冊金七拾五錢
郵稅各冊金八錢

○發兌元 東京 東京橋 隆文館

小栗風葉君著 松岡輝夫君畫

小說

美丈夫

俠人の俠麗人の麗は風葉氏一流の麗筆によりて具さに其極致を盡さる。日東帝國快男子あり、鬚髯黑ふして面は白し、其活躍する處意氣天を衝て鬼神を哭せしめ。其笑ふの時優容娘子をして慕はしむ、今日世を擧げて纖緻細巧の文學に醉ふの時這箇好丈夫出でゝ初めて人意を强ふするに足る。敢えて世の諸兄姉に告ぐ新理想の日本男子にあれ。給はゝ宜敷此書を繙く可し。

クロース裝釘最美本
口繪精巧木版刷
菊判前後貳冊
定價各冊金六拾錢
郵稅各冊金六錢

好評小說

黑法師君著 宮川春汀君畫—口繪精巧木版極濃艶

小說

新細君

婚禮の卷

總クロース製美本
定價一冊金五拾錢
郵稅一冊金六錢

東京第一の花と謠はれたる薫子が、年來の主義なる獨身主義を棄てたるは、不思議ならねど得業生の肩書ひかめしく世に羽振りよき才子を失戀に泣かせて、見るからに恐しき隻眼の牛乳配達を夫と冊さし心ぞ訝しき、著者此疑問を解いて結婚の忽せにすべからざるを敎へぬ。戀に泣く人、夫を戀ふ人讀みてこれに溫かき慰藉を得よ。

黑法師君著 宮川春汀君畫—口繪精巧木版極艶麗

小說

花夜叉

花か夜叉か、佳人、鴛鴦の夢になれて、春光和樂の境を辿りしも束の間、嘗ては窓前思を八つの絃に傳へて、情緒絲より濃やかなりし時、郎がとりし笛竹の音は愁しき運命を呼びて紅閨紫帳つねに涙堰きあへず花顏の纖姫遂に女夜叉と化了す。搏想奇警、行文艶妙併も女性の一面を寫して其眞を失はず。戀に泣く人の一讀を望む

新式洋裝美本
定價金參拾五錢
郵稅金四錢

東京隆文館發兌

廣津柳浪君著　鏑木清方君畫＝口繪精巧木版數十度刷

小說

をとこ氣

筆を現代の思潮に着けて、かの社會主義者を拉し來り、之を文るに人情の轉變、社會の表裏を以てするところ獨り現代小說中の一異彩たるのみならず、群評家が永く渦仰して、其の顯出を要求しつゝある所謂時代思潮を描寫せる作物として、殆んど機微に觸るゝに庶幾きものあり

總クロース製最美本
定價一冊金六拾五錢
郵稅金八錢

東京隆文館發兌

好評小說

廣津柳浪君著　鏑木清方君畫＝口繪精巧木版艶麗

小說

仇と仇

定價各冊金七拾錢
前後貳冊
郵稅各冊金八錢

搆想警妙、波瀾重疊、人をして應接に遑あらざらしめるものは此篇なり。忽ちにして孤を托するの忠臣となり、忽ちにして國を傾くるの妖姬となる。春や紫の曙、金殿の花宴暖かなる時、毒蛇の鱗飛んで盃上を廻り、秋の寢覺の衾冷かなる所、銃聲一發爆然として紅閨の夢を破る。丈夫の覺悟何ぞそれ雄にして、美人の眞情何すれぞ然く悽しきや。

好評小說

加藤眠柳君著　宮川春汀君畫＝口繪精巧木版極艶麗

小說

水彩色

新式洋裝美本
定價金六拾五錢
郵稅金八錢

妙齡花の如き樂人あり早く戀の樂しきを知つて天樂の甘きよりも甘きに醉ひ、青春の才人ありて雲淵の如き失戀の境に呻吟す、成るは破るゝの始めか、離るゝは遭ふの始めか、人生障り多く遭逢必竟浮萍の如し、然も相逢つて事成るの時、麗人これ已に地上の人にあらず、曙曉たる天樂獨り樂人の圓滿なる悲曲を謠ふ、纏綿の情、倩麗の意、盡し得たり此一篇！

德田秋聲君著　鏑木清方君畫＝口繪精巧石版極瀟洒

小說

血薔薇

總クロース裝釘最美本
定價金六拾五錢
郵稅金八錢

行くか春、滿腔の怨恨醫さんと欲するも能はず、靜かに垣に倚つて行雲の白きを仰げば何者の哀音か、曲は長く引きて、脉々たる暗香袂を掠むるを醒めたる如く頭を廻らして、折るや一輪の紅薔薇、露はら〳〵とこぼれて、凄艶骨を刺すの趣あり、血か花か、情は燃ゆる青春の紅花、涙に褪せてまた見るべからず吁々。

東京隆文館發兌

塚原澁柿園君著　桐谷洗鱗君畫　總クロース裝釘最美本

小説

大石良雄

前篇——後篇
定價各冊金七拾五錢
郵税各冊金八錢

著者が老錬圓熟なる筆によりて近古の偉人なる大石良雄の事蹟を最も詳細に最も面白く描寫せしものなり。武士道の如何なるかを知ちんと欲するものはこの空前の大歴史小説を繙け！

東京隆文館發兌

好評小説

鳥海嵩香君著　宮川春汀君畫——口繪精巧木版極濃艶

小説

人の罪

總クロース裝釘最美本
定價一冊金八拾五錢
郵税一冊金拾錢

■讃きに大坂朝日數百金を懸けて大作を天下に募り而して其撰に當れるもの此篇なり■見よ■明月天にあり其光や璽に其の影や清し照出す萬朶の花■雲は芙蓉の如く露は貫珠に似て、佳人長へに艷にオ子長へに美なり■流離や顚沛や運命や境遇や、筆は境に從ふて走り、境は筆の儘に移る■現代上流社會の眞相を盡して餘蘊なく正に一幅の活畫圖を見るが如し。

好評小説

大塚楠緒子女史著　新海竹太郎君意匠　金文字入金縁裝釘

小説

晴小袖

新式洋裝最美本
定價金八拾錢
郵税金八錢

一葉逝き、薄氷去りて、世は等しく閨秀文壇の寂寥を告ぐる中に、獨り大塚楠緒子女史あり。其精緻の想と艶麗なる筆とは早く既に芳名をうたはる。『晴小袖』一卷女史が筐底より出て、金釵にはあらぬ一擲憂として文壇初めて聲あり。一たび之に接せば春風面に溫かに、秋月天に清く綿々の情緒人をして喜憂せしめ、惻々の哀音人をして咳かしむるものあり

渡邊霞亭君著　宮川春汀君畫◎總クロース表紙最美本

小説

次郎島

菊判全一冊
定價金七拾錢
郵税金八錢

幼にして孤となり繼母の手に懸りて虐待せらる何等の悲慘ぞ少妹あり友愛の情に富みて異母兄の業務を助く何等の可憐ぞ途に惡漢に要されて誘拐せらる何等の痛恨事ぞや齡纔に十有一敢て少妹を尋ねて旅程に上る何等の殊勝ぞや之れ寧ろ一篇の立志譚

東京隆文館發兌

田口掬汀君著　鏑木清方君畫　總クロース裝釘優美

小説

情の人

口繪精巧木版飽麗
全一冊定價金六拾五錢
郵税金八錢

沈痛凄麗なる文字を以て、清醇にして純潔なる着想を彩るものは掬汀氏なり、穏健にして優艶眼を明治の新思想に着けて、具さに其の矛盾、衝突、融和の深致を描き、悲痛、幽婉、人をして泣かしめ、人をして怡ましむるは掬汀氏獨特の手腕ならずや。本書は子が苦心の傑作にして昆山の片玉相集りて燦爛たる光を發する如く、玲瓏として明月の白露に映ずるの感あり。

東京　隆文館　發兌

好評小説

小説

うき寐

表裝崭新美本
定價一冊金五拾錢
郵税一冊金六錢

小栗風葉君著　宮川春汀君畫＝口繪精巧木版數十度刷

花柳界裡の女性を寫して之を良く詩化するは著者獨特の境場なり。「うき寐」の一篇、材を狹斜の地に構へて一點卑猥の境に渉らず。併もよく其眞相を描いて、憐む可き美人の風容目前に見るが如く、艶樣痴體盡く拉し來つて其詩趣に資す。虚と實と、落す涙の裏表は、一に讀者の推考に委かせん。

幸田露伴君序　大久保葩雪君著　宮川春汀君畫＝口繪精巧木版數十度刷

花街風俗志

洋裝美本全一冊
定價金六拾錢
郵税＝＝金六錢

露伴先生の序に曰く『德川三百年間の一切の事相は、其の繪神、其の形式、其の趣味、其の文藝、其の色彩、其歴史等一切に於て花柳の街の關係交渉せざるはなきなり』と、德川三百年史の一面を知らんとする諸君は此書を讀め。其の風俗、其の文藝、其色彩を知らんと欲する士は此書を讀め。更に朝に殘燈の夢淡く、夕に絃竹の堅繁き花街の眞趣味を知らんとするの士は此書を讀め、

東京　隆文館　發兌元
京橋

稲岡奴之助君著
宮川春汀君畫

髢

新刊
洋裝美本全一冊
定價五拾錢郵税六錢
發賣

髢は同じ髢なれど之れを着くる人の心々にて優美にもうつればお轉婆にも見ゆ。髢すりポンの色さまざまに、女學生が正しきひだの筋目を分けて當世社會の實相を描き出したるはこの一編。作者は寫實小說家として現文壇一方の旗頭たる奴之助君其の文の艶麗なるは花の如く。玲瓏なる事珠の如きは今更云ふもくだなり。都に名高き當世既婚は今や盛髮を凝して諸兄姉の前に見はる。いざ御手にとられて、厚く締めたる下紐ならぬ包紙の結をとく〳〵とき給へと云爾

長田秋濤君譯三大悲劇

怨

祖國

和田英作君畫

總クロース製本頒美麗

定價各册六十五錢
郵稅各册金六錢

原著は佛國作劇家スクリーブ氏が靈腕に依りて成り夙に泰西劇壇に喧傳賞揚せられしもの、往年紅葉山人の在時譯者が共に圖りて遂に此曩世の異芳を我落莫たる梨園に移さんと企てし苦心の後故あり篋底に秘めしが斯界の時事に感ずる所あり今茲に三大悲劇の一として公にせらる本書の價値は敢て多言を贅せず、淨窓明几の下試に一本を手にせば魅するが如き一篇の興趣は腋下萬斛の涼風と共と滾々と湧いて盡きざるものあらん

本書は佛國翰林院學士にして劇評家兼作劇家たるサルヅー氏原作の史的大悲劇なり。一篇の骨子を慷慨の志士が祖國の業に執りこれに配するに暴虐の敵將可憐の少女寶國の姦婦等を以てし豪壯と悲哀殘忍と愛情とを巧みに按排して事件を清新ならしめ從來の我劇壇に髣髴活動せしめ、と人物とを眼前に見ざる非凡の雄篇をなす。本書に殆んど其類を見ざる非凡の雄篇をなす。本書が「怨」及び「七首」と共に我國現時の梨園の氣息なる事疑なけんを以て珍重すべき逸品

第三卷 七首 九月中出版

東京隆文館合資會社發兌元
電話新橋二五八六
東京市京橋區尾張町六番地

岡鬼太郎君著 鏑木清方君畫＝口繪木版數十度刷

小説 花柳巷談 **二筋道**

新式製本 定價金五拾錢 郵稅金六錢

滿目のハイカラ殆んど見るに堪えざるの時、著者の不平筆端に迸つて小氣味好き一部の小説成る、江戸の生粹を味はんと欲する者は來れ、江戸藝者の面目を知らんと欲する者は來れ、我は是れ明治の大艶史、野暮と氣障との手に觸るゝを許さず。

好評小説

德田秋聲君著 宮川春汀君畫＝口繪精巧木版數十度刷

小説 **病戀愛**

表裝新斬 定價金六拾錢 郵稅金六錢

題して病戀愛といふものは蓋し戀愛の苦痛と憂愁とがはるかにその愉快と幸福とより、大にして、やゝもすればこの人生の光明を蝕し戀せる男女を驅つて絶望の淵に赴かしむること多きを暗示せんがためならざるからんや。さもあれ苦痛の裡、憂愁の裡なほ且ついふにいはれぬ喜悅存じて此寂寞なる人生を彩どるもの是れ戀愛の眞味に非ずや

東京隆文館發兌

田山花袋君
二大快著

新刊

旅すがた

表紙意匠口繪　平福百穗君畫

三色版口繪　總洋布製美本　定價金六十錢　郵税金八錢

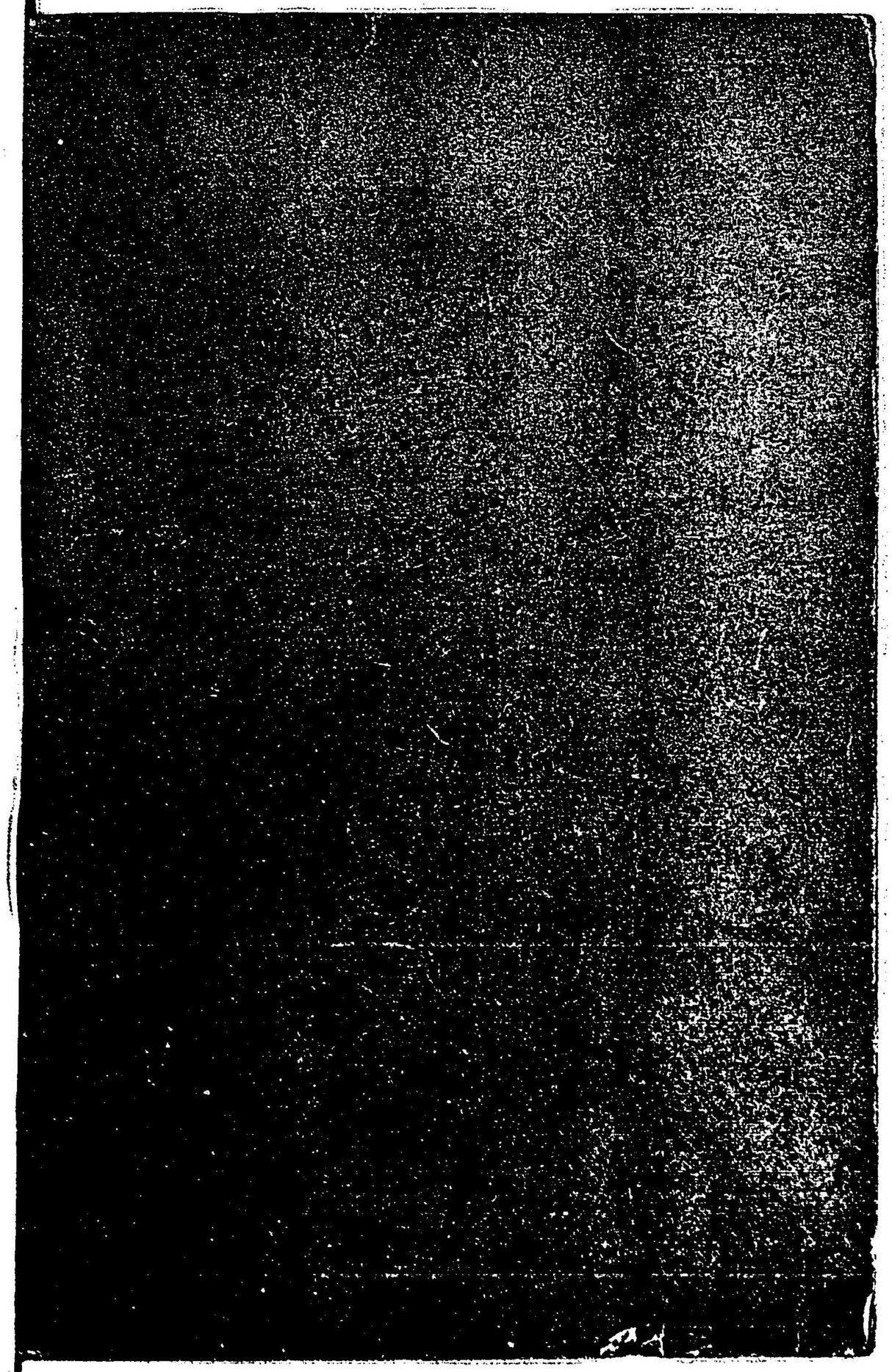
若狹道、北國街道、奈良雨中記、山づたひ、香山遊記、觀戰記、軍中の一日、旅より旅、郊外、古驛、裏富士、山小屋

一幅の山水畫は直に是れ山水詩。優麗の文多趣の筆、描きて神に入らざるなく、叙して景を盡さざるなし。之を讀まざる者、共に風景と詩美とを語るに足らざる也。

紀行文集

草枕

宮川春汀君意匠　好評再版

口繪　總洋布製美本　定價金六十錢　郵税金八錢

發兌元　東京京橋尾張町　隆文館